

瀬戸大橋建設に伴う
埋蔵文化財調査概報(Ⅶ)

下 川 津 遺 跡
岡 宮 古 墳
聖 通 寺 城 跡

1986・3

香川県教育委員会
本州四国連絡橋公団

瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報〈Ⅵ〉正誤表

ページ	行	誤	正
例言	5	とぎり	とぎり
6	10	蓮尺	連尺
7	30	弥生時代前期には逆のぼる	弥生時代前期に逆る
8	調査報告の 概要10月	多量の遺物は継続して出土	多量の遺物が継続して
10	7	弥生時代前期には逆のぼる	弥生時代前期に逆る
10		表1・遺溝番号対応表	表1・遺構番号対応表
26	6	刻目	刻み目
◇	10	頸	頸
◇	15	堆土	胎土
29	9	自川河川	自然河川
35	14	大型	大形
◇	16	◇	◇
◇	19	(完型)	(完形)
43	表・3	面の残存深度(0.5cm)	隅丸方形
51	5	比較して土変化に	比較して変化に
◇	10	総数確認数	総確認数
54	9	黒灰粘土質	黒灰粘質土
55	14	機種	器種
56	8	堆積層の一つである黄褐色	堆積層の一つである黄褐色
69	4	小型	小形
73	1～2	認められるものして	認められるもの選して

瀬戸大橋建設に伴う
埋蔵文化財調査概報(VII)

下 川 津 遺 跡
岡 宮 古 墳
聖 通 寺 城 跡

1986・3

香川県教育委員会
本州四国連絡橋公団



発掘区全景



焼失家屋 (SBNb05)



かまど (SBNa05)



住居跡出土土器 (SBNa02)



土器出土状況 (SBNa02)



東部低湿地(SXNa02)出土犁



木器(SXNa02)



綠釉陶器 (SXNb01)



勾玉 (SBNa07)



円面硯 (SXNa02)



鉄針 (SXNa02)

例 言

1. 本書は瀬戸大橋建設に伴って、昭和60年度に実施した下川津遺跡と聖通寺城跡の発掘調査概要報告である。

なお、昭和59年度予備調査で実施した岡宮古墳の調査報告も併せて収録した。

2. 発掘調査は本四公団より委託を受け香川県教育委員会文化行政課が実施した。調査体制は以下のとおりである。

<p>総 括 県教育次長 県民ホール準備室長 文化行政課長事務取扱い 榎 原 悠 前文化行政課長 磯 田 文 雄 (S. 60. 12. 21転出)</p> <p>主 幹 松 本 豊 胤 課長補佐 片 山 亮</p> <p>庶 務 係 長 宮 谷 昌 之 主 事 小 河 恵 朗 主 査 加 納 覚 (S. 60. 6. 1転出)</p>	<p>香川県教育委員会文化行政課 香川県埋蔵文化財発掘調査 坂出連絡事務所</p> <p>調査総括 所 長 松 下 均</p> <p>調査担当 主任技師 大 山 真 充 藤 好 史 郎 藤 田 任 亮 技 師 西 村 尋 文 松 野 一 博 松 原 伸 二 浜 田 重 人 瀬戸内海歴史民俗資料館 専門職員 松 本 敏 三 嘱 託 安 藤 史 郎 坂 口 淳 子 岩 崎 晃 彦</p>
---	---

3. 執筆にあたっては、調査担当者が協議した上で次のように執筆分担した。

I…大山, II-1…藤好, II-2…松野, II-3・₁…藤好・松原・安藤, II-3・₂…松野, II-3・₃…藤田・松野・藤好, II-4…藤好, III…松野, IV…安藤・坂口
 全体編集は藤田、松野が行った。

4. 調査の実施や整理・報告に際し下記の方々から多大なご協力・ご教示を受けた。記して謝意を表したい。

本四公団坂出工事事務所・地元各瀬戸大橋対策協議会・下川津自治会・中原自治会・中塚自治会・坂出市・丸亀市・綾歌町・綾南町・飯山町各教委・県瀬戸大橋対策室・坂出市瀬戸大橋対策室・足利健亮・東 潮・足立克巳・石野博信・市田京子・今井和彦・植野浩三・潮田鉄雄・桂 真幸・金田章裕・亀井正道・亀田修一・川畑 迪・木下 忠・黒崎 直・河野道明・丹羽祐一・橋本久和・福田正継・町田 章・森 浩一

総 目 次

I	昭和60年度調査の概要	1
II	下川津遺跡の調査	
	(Na, Nb, Ne, Sa区の概要)	
	第1章 立地と環境	5
	第2章 調査の方法及び経過	7
	第3章 調査の概要	10
	第1節 国道11号線より北部の調査	10
	1. はじめに	10
	2. 竪穴式住居	12
	3. Na, b区出土遺物	26
	4. 小結	28
	第2節 国道11号線より南部の調査	31
	1. 古墳時代より新しい時期の遺構・遺物	31
	2. 弥生時代～古墳時代の包含層	40
	第3節 東部低湿地の調査	44
	1. はじめに	44
	2. 土層と地形	46
	3. 弥生時代後期の包含層	49
	4. 古墳時代後期以降の包含層	50
	5. 掘立柱建物	54
	6. Sa区東部落ち込み	55
	7. 小結	56
	第4章 おわりに	62
III	岡宮古墳の調査	
	第1章 はじめに	63
	第2章 墳丘	65
	第3章 埋葬施設	66
	第4章 遺物出土状況	68
	第5章 遺物	68
	第6章 まとめと考察	70
IV	聖通寺城跡	
	第1章 はじめに	75
	第2章 立地と環境	76

第3章 調査の方法と成果	76
第4章 出土遺物	83
第5章 調査の成果と今後の課題	85

挿 図 目 次

60年度調査の概要	
第1図 下川津遺跡竪穴住居跡発掘風景	1
第2図 下川津遺跡自然河川発掘風景	2
第3図 大浦浜遺跡遺物写真撮影風景	4
下川津遺跡	
第1図 青ノ山山頂より東を望む	5
第2図 周辺遺跡分布図	6
第3図 発掘区設定図	9
第4図 遺構配置概念図	11
第5図 SBNb04	12
第6図 SBNb05炭化材・遺物出土状況	13
第7図 SBNb05	14
第8図 SBNb04・SBNb05・SBNb08平面図	15
第9図 SBNa11・SBNa13	16
第10図 SBNa02	17
第11図 SBNa06	17
第12図 SBNb09	17
第13図 SBNb08	18
第14図 SBNa07	19
第15図 SBNa05	19
第16図 SBNa03	20
第17図 SBNa09	20
第18図 住居跡出土遺物実測図 (1)	21
第19図 住居跡出土遺物実測図 (2)	22
第20図 住居跡出土遺物実測図 (3)	23
第21図 住居跡出土遺物実測図 (4)	24
第22図 住居跡出土遺物実測図 (5)	25
第23図 住居跡出土遺物実測図 (6)	26
第24図 SBNa11出土小形仿製鏡	27
第25図 SBNa06出土板状鉄斧	27
第26図 SBSa01	31
第27図 SBSa02	32
第28図 SBSa05	32
第29図 SBSa09	32
第30図 SBSa08	33
第31図 SBSa07	33
第32図 SBSa04	34
第33図 SXSa07	34
第34図 遺物実測図	38
第35図 遺物実測図	39
第36図 SXSa24	40
第37図 包含層出土遺物実測図	41
第38図 F・G-22南壁土層図	41
第39図 SXSa24出土遺物実測図	42
第40図 弥生時代前期包含層出土遺物	43
第41図 SXNa02, 3・4・5区 付近発掘風景(南より)	44
第42図 東部低湿地発掘区割図	45
第43図 Ne区完掘状況 (手前SBNe01, 北東隅より)	46
第44図 Ne区南壁・北壁土層図	47-48
第45図 SXNb03土器出土状況	49
第46図 自然木等出土状況	52
第47図 犁実測図	53
第48図 SBNe01	54
第49図 Sa区落込み東壁土層実測図	55
第50図 Ne区完掘直前風景	56
第51図 Ne区出土遺物実測図(須恵器)	58
第52図 Ne区出土遺物実測図(土師器)	59
第53図 Ne区出土遺物実測図(土師器)	60
第54図 Sa区落込み出土遺物実測図	61
岡宮古墳	
第1図 岡宮古墳遠景	63
第2図 発掘風景	64

第3図 発掘風景……………64	第2図 トレンチ配置図……………77
第4図 岡宮古墳周辺地形測量図……………65	第3図 第6トレンチ周辺地形測量図 及び土層図…78
第5図 石室周辺土層図……………65	第4図 第1～5トレンチ土層図……………79, 80
第6図 岡宮古墳床面・墓坛廻り方検出状況…66	第5図 第7・9・10トレンチ周辺地形測量図 及び土層図……………81
第7図 岡宮古墳床面下部実測図……………67	第6図 第4・8トレンチ周辺地形測量図……………82
第8図 岡宮古墳基底部平面図……………68	第7図 第8トレンチ土層図……………83
第9図 遺物分布状況……………69	第8図 第8トレンチ遺物出土状態概念図……………83
第10図 岡宮古墳出土遺物実測図……………69	第9図 トレンチ出土遺物実測図……………84
第11図 黒島林8号墳……………72 (昭和56年度年報より転載)	第10図 北峰より中峰(本丸跡)を見る……………86
第12図 上母神4号墳……………72 (上母神4号墳発掘調査報告書より転載)	第11図 二の丸跡より本丸跡を見る……………86
聖通寺城跡	第12図 聖通寺城跡, 本丸跡周辺概念図……………87
第1図 遺跡の位置……………75	

表 目 次

下川津遺跡

表1 遺構番号対応表……………10
表2 Na・Nb区堅穴住居一覧……………43
表3 Sa区掘立柱建物一覧……………43
表4 SXNa02, 0・3・4・5区出土土器集計……………50

表5 SXNa02, 発掘区別土器出土量……………50
表6 東部低湿地出土土器一覧……………51

岡宮古墳

表1 横穴式石室玄室類例一覧……………71
表2 岡宮古墳出土土器観察表……………74

図 版 目 次

巻首図版

- (1) 発掘区全景
- (2) 焼失家屋 (SBNb05南より)
かまど (SBNa05)
- (3) 住居址出土土器 (SBNa02)
土器出土状況 (SBNa02)
- (4) 犁 (SXNa02)
東部低湿地出土土器
- (5) 緑釉陶器 (SXNb01)
門面硯 (SXNa02)

- 勾玉 (SBNa07)
鉄鏃 (SXNa02)

下川津遺跡

- 図版1 (1) SBNb05 全景
(2) SBNb05 炭化材検出状況
- 図版2 (1) SBNb01 完掘状況
(2) SBNb01 遺物出土状況
- 図版3 (1) SBNa01 完掘状況
(2) SBNa01 床面甕出土状況
(3) SBNa02 完掘状況

- 図版4 (1) SBNa02 床面壺出土状況 (3) SBNa02 出土土器
 (2) SBNa02 床面遺物出土状況 (4) SBNa02 出土土器
 (3) SBNa02 床面土器出土状況 (5) SBNb09 出土土器
- 図版5 (1) SBNa11・13完掘状況 (6) SBNb09 出土土器
 (2) SBNa11 小形仿製鏡出土状況 (7) SBNa06 出土土器
- 図版6 (1) SBNb09 完掘状況 (8) SBNb07 出土土器
 (2) SBNb09 遺物出土状況 図版18 (1) SBNb06 出土土器
 (2) SBNa07 出土土器
- 図版7 (1) SBNa07 全景 (3) SBNa07 出土土器
 (2) SBNa07 遺物出土状況 (4) SBNa07 出土土器
 (3) SBNa07 勾玉出土状況 (5) SBNa07 出土土器
- 図版8 (1) SBNa05 完掘状況 (6) SBNa07 出土土器
 (2) SBNa05 カマド検出状況 (7) SBNa07 出土土器
- 図版9 (1) SBNa03 完掘状況 (8) SBNa05 出土土器
 (2) SBNa03 カマド内遺物出土状況 (9) SBNa05 出土土器
 (10) SBNa03 出土土器
- 図版10 (1) Na区建物柱穴検出状況 図版19 Sa区溝(SDSa01・03出土遺物)その1
 (2) SXNa01 大溝(東より) (1) 土師質土器
 (2) 黒色土器
- 図版11 (1) Sa区 完掘状況 図版20 Sa区溝(SDSa01・03出土遺物)その2
 (2) SDSa03 遺物出土状況 (1) 土師質椀
 (2) 土師質皿
- 図版12 (1) SBNe01 検出状況 (3) 緑釉陶器椀
 (2) SXNa02 籬^{カキ}出土状況 (4) 須恵器杯
 (5) 須恵器杯
 (6) 黒色土器椀
- 図版13 (1) SXNa02 鋤柄等出土状況 図版21 (1) Ne区出土須恵器
 (2) SXNa02 木器・土器出土状況 (2) Ne区出土土師器
 (3) 器種不明土師器(SXNa02・0区)
 (4) 器種不明土師器(SXNa02・0区)
- 図版14 (1) SXNa02 竪杵出土状況 図版22 (1) 鋤の柄
 (2) 鋤の柄部分拡大
 (3) 木槌
 (4) 竪杵
 (5) 紡錘車
 (6) 櫛
- 図版15 (1) SBNb04 出土土器 図版23 (1) 鋤先
 (2) SBNb04 出土土器 (2) 盆(上から)
- 図版16 (1) SBNb03 出土土器
 (2) SBNa11 出土土器
 (3) SBNb01 出土土器
 (4) SBNb01 出土土器
 (5) SBNb01 出土土器
 (6) SBNb01 出土土器
 (7) SBNb01 出土土器
- 図版17 (1) SBNa02 出土土器
 (2) SBNa02 出土土器

- (3) 盆 (横から)
(4) 絡梁たたり
(5) 絡梁上部拡大
(6) 不明木器
(7) 不明木器
- 図版24 (1) 琴柱ことじ
(2) 船形模造品
(3) 下駄
(4) 木錘
(5) 鐙
(6) 不明木器
(7) 不明木器
- 図版25 (8) 鉢わし
(1) 斎串いし
(2) 斎串
(3) 不明木器
(4) 不明木器
(5) 糸巻
(6) 不明木器

(7) 不明木器

(8) 不明木器

岡宮古墳

- 図版1 (1) 発掘前風景
(2) 床面検出状況
- 図版2 (1) 掘り方及び床面検出状況
(2) 基底石抜き取り穴及び床面下部構造
(3) 墓壇基底部
- 図版3 岡宮古墳出土遺物

聖通寺城跡

- 図版1 (1) 聖通寺山 (昭和28年頃撮影)
(2) 第4・8トレンチ周辺地形
- 図版2 (1) 第3トレンチ (完掘)
(2) 第4トレンチ設定
- 図版3 (1) 第4トレンチ土層堆積状況
(2) 第6トレンチ設定
- 図版4 (1) 第6トレンチ土層堆積状況
(2) 第7トレンチ (完掘)

I 昭和60年度調査の概要

1. はじめに

昭和51年度より開始した瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査も本年度で10年目となった。今年度も例年どおり、本州四国連絡橋公団との間で締結された委託契約にもとずき調査を実施した。

本年度調査の特色は、本格的な発掘作業が再開されたことである。瀬戸大橋関連の調査は海峡部と陸上部に分けられるが、海峡部の島々での発掘作業は昭和57年度上半期で一応終了し、その後は工事設計変更等に伴う調査を昨年度までに3件実施した程度である。昭和57年度下半期からは、出土遺物の整理作業と報告書作成に重点がおかれていたが、昨年度の予備調査の結果陸上部においても、大規模調査が必要なことが判明し、今年度から本格的な発掘作業の再開となったわけである。

これに伴い職員の増強も行われ、昨年度の2倍の数となり、下川津遺跡の発掘作業が中心となって本年度の調査が進められた。

下川津遺跡は当初の予想をくつがえす内容をもつ遺跡で、特に自然河川からは多量の木製品が出土し注目をあつめた。

ところで、本書で報告している岡宮古墳は下川津遺跡の北にある角山南麓に営まれた古墳である。昨年度調査であるが、下川津遺跡との関連が強いと考えられるため、整理を急ぎ本概報集に収録した。



第1図 下川津遺跡竪穴住居跡発掘風景

2. 陸上部発掘調査

昨年度陸上部予備調査を実施したところ、聖通寺山地区と下川津地区で本格的な調査が必要なが
判明したため、本年度より発掘調査を開始することになった。

ここに至るまでの経緯については、昨年度刊行の『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告
(Ⅲ)』に記されているが、ここで改めてみていくことにしよう。

昭和46年度 架橋用地等関係地区における埋蔵文化財分布図を本州四国連絡橋公団へ提出。

昭和48年度 瀬戸大橋ルート関連公共事業調査が実施され、陸上部について幅200m、距離1.5kmの
範囲内に所在する遺跡の分布図を作成、提示。

昭和52年度 国道30号線関連調査事業の一環として埋蔵文化財分布調査を実施し、成果を報告。

昭和56年度 陸上ルートほぼ確定に伴い再度分布調査実施。

昭和57年度 陸上ルート決定に伴い詳細遺跡分布地図を作成。本四公団坂出工事事務所へ提示。

昭和58年度 予備調査方法検討。試掘区域を図上設定、坂出工事事務所へ提示。

昭和59年度

6月4日 下川津地区、予備調査開始

9月3日 角山地区、予備調査開始

11月5日 茶臼山地区、予備調査開始

12月13日 聖通寺山地区、予備調査開始

以上のような経過を経て、本年度からの本調査になったわけである。



第2図 下川津遺跡自然河川発掘風景

聖通寺城跡については、予備調査において明確な遺構は検出できなかったものの、城郭存続期と考えられる遺物が比較的まとまって出土した地区があった。このため、この箇所について再度確認のため昭和60年4月10日より調査を実施した。調査結果は本書に収録されているため、御参照下さい。

下川津遺跡については予備調査の結果、工事予定地の東半分約9万㎡に遺跡が広がっていることが明らかになり、昭和60年5月13日より発掘を開始した。発掘は昭和62年度までの3ヶ年計画で行う予定で、北から南へ向って順次作業を進めていくこととした。この調査方針のもとに本四公団と協議を重ね、具体的な調査スケジュールが決められた。本年度は工事を急ぐ国道11号線の両側と、市道・農業用水路付け替え地域を優先して発掘を進め、全体の約30%の発掘が終了した。

1年間の調査をふり返った今、反省すべき点は多いが、調査初年度ということで、予備調査と本調査との関連についてふれておこう。予備調査の発掘面積は2300㎡で、これは対象面積の約1%に該当する。1%調査結果から本調査の範囲を確定し、本調査一年目である本年度の調査日程と調査費の積算を行ったわけであるが、範囲については今年の調査結果からみて大きな誤差は生じていない。しかし、日程や積算については狂いが生じた。つまり、1%調査では遺跡の内容までは把握できず、調査計画の資料としては精度が低いのである。今後はいつ、いかなる目的で、どの程度の予備調査を実施するかを十分に検討する必要にせまられたといえるだろう。

3. 海峡部整理作業

海峡部調査の本格的な整理作業は、昭和57年度から進められており、今年で4年目となった。この整理作業は、発掘を行った12遺跡のうち5遺跡を選び、本格的な整理を実施し正式報告を行うもので、5遺跡以外のものは、全体のまとめである総括編でふれるといった計画である。

すでに昭和58年度には羽佐島遺跡（Ⅰ）、大浦遺跡が刊行済で、昭和59年度は羽佐島遺跡（Ⅱ）、与島西方遺跡（現在校正中）の整理作業が完了している。

大浦浜遺跡は昭和58年度以来整理を進めている。昭和58・59年度は、出土遺物の実測を中心に作業を進めた。本年度は写真図版編・遺構挿図作成ならびに原稿執筆を行った。しかし、先述した陸上ルート下川津遺跡の発掘調査を優先させたため、整理作業が一時中断した。このような事情から、遺構挿図と原稿執筆が次年度へ持ちこすことになり、報告書刊行は昭和61年度の予定である。

(大山)



第3図 大浦浜遺跡遺物写真撮影風景

II 下川津遺跡の調査 (Na, Nb, Ne, Sa区の概要)

第1章 立地と環境

香川県は南に阿讃山脈をいただき、その麓の丘陵地とはほぼ半円形に瀬戸内海に向かって展開する平野部からなる。平野には南部の丘陵地に源を発する河川が北流している。

下川津遺跡は瀬戸内海に面し、港町として成立した坂出市の南西部にある川津町下川津・中原両地区にまたがって位置しており、県中央部の綾歌・綾南両町に水源をもち、宇多津を河口とする大東川下流の海拔5m前後の沖積地に占地する。大東川流域には上流に弥生時代前期の行末遺跡、数十基の古墳が群集する岡田万塚、白鳳期の建立とされる法軍寺跡など著名な遺跡が分布している。

下川津周辺に目を移すと、当地からは北に角山、東に常山、金山、南に飯野山、西に青ノ山といった低い山塊を望むことができ、それぞれに古墳を中心とした遺跡の所在が知られている。

当地より最も近い角山山麓には昨年度調査を実施し、6世紀末の横穴式石室を確認した岡宮古墳など7基の古墳が確認されている。角山と峰を接して北にある茶臼山山頂には前方後円墳として知られる田尾茶臼山古墳がある。さらに北に続く聖通寺山北嶺頂上には積石塚があり、南嶺には中世山城として奈良氏が拠った聖通寺城跡がある。金山はサヌカイトの産地として国分台と並んで全国的に有名であるが、この東麓の台地にはハカリゴロ古墳、爺ヶ松古墳といった積石の前方後円墳が知られている。また、金山と郷師山との谷筋には7世紀代の須惠器窯跡として峠奥窯跡群が挙げられる。大東川を挟んで対峙する青ノ山では30~40基に及ぶ古墳群の存在が知られ、須惠器窯も南麓で2基確認されている。この他、常山西麓の独立丘陵に連尺茶臼山古墳（前方後円墳）、小山古墳が知られる。

山麓を中心に展開するこれらの遺跡群と、坂出市南部においては初めての集落跡の調査となる下川津遺跡とがどのように関連をもってくるかは、大東川流域の文化を解明してゆく上で重要な意義をもつことになる。(松野)



第1図 青ノ山山頂より東を望む



- | | | |
|------------|-------------|-------------|
| 1 下川津遺跡 | 11 笠山1号、2号墳 | 21 城山山城 |
| 2 聖通寺山古墳 | 12 笠山遺跡 | 22 弥栄神社古墳群 |
| 3 聖通寺城跡 | 13 ヒコシ峠遺跡 | 23 割古1号、2号墳 |
| 4 田尾茶臼山古墳 | 14 金山古墳 | 24 向山古墳 |
| 5 岡堂古墳 | 15 長者原古墳 | 25 三ノ池古墳 |
| 6 南田尾古墳 | 16 郷跡山古墳 | 26 青ノ山古墳群 |
| 7 瀬見堀古墳 | 17 郷跡山遺跡 | 27 青ノ山2号高 |
| 8 下川津1号墳 | 18 ハカリゴロ古墳 | 28 吉岡神社古墳 |
| 9 小山古墳 | 19 縮ヶ松古墳 | |
| 10 蓮尺茶臼山古墳 | 20 真伏古墳 | |

第2図 周辺遺跡分布図

第2章 調査の方法及び経過

調査の方法について

瀬戸大橋から伸びる国道30号線が現在の国道11号線と交わるインターチェンジ建設予定地が、今回の下川津遺跡の調査対象地である。瀬戸大橋が昭和63年春に開通の予定ということもあり、発掘調査の完了期限が確定し、期間的にゆとりの無い発掘調査を余儀なくされることとなった。そこで、本四公団の工事工程を反映した調査工程を計画した。

今年度の発掘調査は、国道11号線の北側では、現集落域を除く全域、国道11号線の南側の調査対象地では11号線をまたぐ下川津高架橋の橋脚建設予定地を調査対象地の東部に位置する側道水路部を中心に実施した。

昭和59年度に実施した予備調査の成果から、調査対象地は、中央部を南北に伸びる標高4～6mの微高地に弥生時代末～中世にかけての集落跡が広がり、その東側の低地は湿地状で、西側の低地は現在の大東川の河川氾濫による堆積層がかなりの部分広がっていることが推定された。そこで集落部が立地すると考えられた中央の微高地部を中心として発掘することとし、周辺の低地部をトレンチで確認する調査を計画した。

遺構等の実測は航空写真測量によることとし、図面精度の一定化と効率化を計ることとした。写真測量による実測図は1/20と1/50の縮尺で実施し、必要に応じて、使い分けることとした。また国道11号線の北部で調査対象地の西部にあたるNf区ではボーリングによる堆積状況の確認を併せて実施した。また今年度末に国道11号線より南に位置するSe区で水田跡を検出し、宮崎大学藤原宏志助教授にプラントオパールによる分析をお願いした。

調査区の設定にあたっては、地形を生かすため、真北より西に22°30'偏った方位で20m方画のメッシュを対象地全域にかぶせた。20m方画の各グリッドの名称は東西方向を東からアルファベットで、南北方向を南から数字で基準線を走らせ、各グリッドの南東隅の交差点で表すこととした。

なお、遺物の整理については、現場事務所で水洗等の基礎作業を行った後、文化行政課坂出連絡事務所にて注記・復原・実測・写真撮影を実施した。また遺物写真の中で木器の撮影は業者委託により実施した。本概報もその成果の一つである。

調査の経過について

今年度の調査は、昭和60年5月1日から開始し、今回の概報で扱った国道11号線の南北に隣接するNa・b区とSa区の調査から着手した。11号線の北に位置するNa・b区では堅穴住居跡が集中して検出され、南に位置するSa区では掘立柱建物群が検出された。

11号線より北の調査区では、東側で弥生時代前期には逆のぼる自然河川が確認され、多量の土器や木器等を含むため、当初のトレンチ調査の予定を変更し、可能な限り全面を調査することにした。自然河川の川底は、現地表から3m近くの比高差があり、当初の調査予定より大幅に作業量が増加した。このため、調査員・作業員等を増強することとなった。

国道より北部の調査で、東側の自然河川部の調査は、一部拡張することが期間的にできなかった箇所もあるが、7世紀代のカラスキが出土するなど注目するべき成果もあった。国道より北部では現在の民家が立地している箇所を除き、一応の終了をみた。その後調査は南側の側道水路部の調査が中心となり、自然河川も調査対象地に含まれる部分は、全掘に近い調査を実施した。側道のほぼ中央部にあたる

Sc区では調査区の東部で、自然河川の東岸とそれに続くテラスを確認し、古墳時代後期の竪穴住居群の一部を検出した。

61年になり、側道水路部の調査が部分的に終了し、国道より南側のS地区では北寄りのSe区の調査に着手した。調査区の中央やや西寄りを南北に走る市道、通称“高木道”の西側にも集落域が広がっており、その西側は底地になっていて、平安時代中期以前に逆のぼる水田跡を確認した。昭和61年度に水田跡が広がっている地区の調査も実施する予定であり、水田跡の広がりや変遷が判明する可能性が高い。今年度の調査経過は以下を参照されたい。

(藤好)

調査経過の概要

昭和60年	1・2日 当面調査を実施する国道11号線をはさむ	11月	1日第2回目の航空測量実施。2日現地説明会。上旬Ne区の調査一応の終了を見る。Sc区では平垣部の建物群の調査が終了し、自然河川の調査に入る。中旬Sb区も自然河川の調査開始。Sc区では自然河川の東側で竪穴住居跡検出。調査区南端に位置するSd区調査開始。下旬Sb区で自然河川から“しがらみ”検出。29日第3回目の航空測量実施。
5月	Na・b区・Sa区の杭打ち作業を行い、下川津遺跡の本調査を開始した。13日、伐開作業及び重機による表土層の除去作業開始。	12月	3日第3回目の航空測量実施。Sd区の調査を除き各地区とも自然河川の調査を実施。Sb区では調査区を抜け、別の自然河川検出。中旬自然河川及びSd区の調査の継続。20日第4回目の航空測量を実施。下旬自然河川の調査及南端C・Dの7・8区調査開始。27日昭和60年現場終了。
6月	Na・b区では竪穴住居跡の検出作業。Sa区は、溝・掘立柱建物の精査。中旬Na区後にカラスキ等が下位から検出される部分の上位を重機により掘り下げる。グライ粘土層まで下げるが出水のため中断。下旬には梅雨のため、雨天日が断続的に続き、調査がなかなか進展せず。	昭和61年	6日発掘作業開始。上旬Sd区の南端のG・H
7月	上旬、Na区カマド検出作業を開始。Nb区竪穴住居跡の床面精査。Sa区i-23グリッドの遺構完掘。中旬、各地区の発掘作業継続。24・25日坂出市内の小中学生を対象として現地説明会実施。	1月	2～5区調査完了。工事工程に追われる。Sd区調査区拡大G6以东の部分に着手。中旬調査継続。28日第5回目の航空測量実施。Sb・c区の調査完了。Se区の東部調査開始。概観作成開始。
8月	4日現地説明会を実施。上旬遺構の検出に各地区とも一応目度立つ。20日雨天のため順延していた第1回目の航空測量を実施する。下旬各地区とも軌面後の残務処理作業を実施。Ne区の調査に着手。Nb区の東側の谷筋をSXNb03として掘り下げ、庄内併行期の土器が多量に出土。	2月	上旬Sc区の西側の仮設水路部調査開始。Se区西部調査開始。中旬調査継続。28日第6回目の航空測量実施。Sd区の工事予定地の調査を月末で終了。
9月	予想を上まわる遺構遺物のため、班編成を1班増の4班とする。歴史民俗資料館より松本敏三研究員が兼務として現場参加。上旬Na・b・Sa区調査終了。Ne区の調査では遺物量の多さのため調査区拡大。Nf区のトレンチ調査実施。大東川の河川氾濫部検出。25列の延長線上でボーリング調査実施。Nd区・Sb区の調査開始。下旬Ne区で多量の木器・土器出土。	3月	上旬 Se区の西側で水田跡の存在の可能性が判明。仮設水路部の北端及び調査区東端部調査開始。中旬仮設水路部調査終了。19日宮崎大学藤原宏志助教授によりSe区西側低地部のプラント・オパール分析のサンプリングを実施。22日本年度最後の航空測量実施。下旬になり土曜、日曜日も現場作業実施。月末は今年度調査予定地の調査が終了。今年度は31日まで現場作業実施。
10月	上旬浜田重人、西村尋文両技師現場参加。Ne区では多量の遺物は継続して出土。Sc区で掘立柱建物群検出。下旬Ne区で標高2.8mで予想外の掘立柱建物検出。		



第3図 発掘区設定図

第3章 調査の概要

第1節 国道11号線より北部の調査

1. はじめに

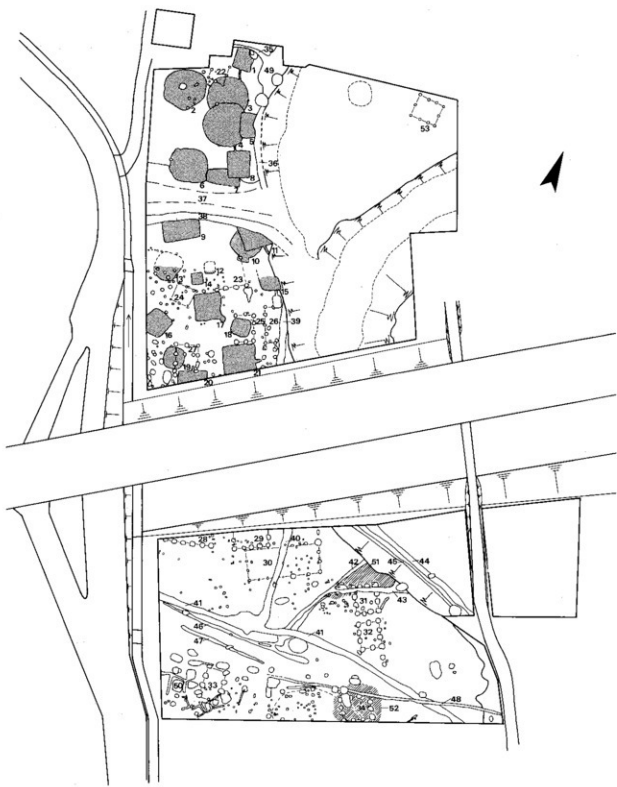
国道11号線より北の調査区は、中央を微高地が南北方向に伸びる。微高地の標高は、現水田面で4.3m前後を計る。微高地の東西は、比高差が調査前の状況で0.3~1mほど低い水田面となっていた。調査の結果、中央の微高地では、耕作土直下で弥生時代末以降の住居跡等が確認され、東側の低地部では上限が弥生時代前期には逆のぼると考えられる自然河川が検出された。西側の低位水田面の下位からは、大東川の河川氾濫によって堆積したと考えられる砂礫層が検出された。住居域の西側は、かなりの部分が大東川の河川氾濫によりえぐられていると想定していたが、今年度のその後の発掘調査では、住居域が西に伸びている箇所や平安時代中葉以前に逆のぼる水田跡が確認されるなど、非常に複雑な様相を呈することが判明した。

ここでは、中央の微高地上で確認された住居跡を中心として、その様相を報告したい。

(藤好)

番号	遺構名	掲載頁	番号	遺構名	掲載頁	番号	遺構名	掲載頁
1	SBn09	17	19	SBn02	16	37	SXn01	—
2	SBn03	12	20	SBn03	20	38	SDn02	—
3	SBn04	12	21	SBn05	19	39	SDn01	—
4	SBn05	13	22	SBn10	—	40	SDSa03	35
5	SBn08	18	23	SBn14	—	41	SDSa01	35
6	SBn01	14	24	SBn15	—	42	SXSa02	35
7	SBn07	18	25	SBn16	—	43	SXSa01	35
8	SBn06	18	26	SBn17	—	44	SDSa02	36
9	SBn07	18	27	SBn18	—	45	SDSa07	—
10	SBn11	16	28	SBn04	33	46	SDSa08	35
11	SBn13	19	29	SBSa02	32	47	SDSa06	35
12	SBn10	20	30	SBSa01	31	48	SDSa04	35
13	SBn08	16	31	SBSa05	32	49	SXn02	35
14	SBn09	20	32	SBSa09	32	50	SXSa07	34
15	SBn12	16	33	SBSa07	33	51	SXSa04	40
16	SBn01	16	34	SBSa08	33	52	SXSa24	40
17	SBn04	19	35	SDn04	35	53	SBn01	54
18	SBn06	17	36	SDn05	—			

表1 遺構番号対応表



第4図 遺構配置概念図（遺構名は表1参照）

2 竪穴式住居

SBNb03

東西7.7m・南北7.6mの不整形なプランの竪穴式住居である。2ヶ所に掘乱坑がある。確認面から床面まで約20cmを測る。住居内北側から西側にかけてベット状遺構が、また北側には壁溝がめぐる。柱穴は9穴確認された。床面はほぼ中央部に炉をもち、中央部を中心として周囲には炭化物・焼土塊が広く分布し、焼土ピットが検出された。尚、ここでいう焼土ピットとは炉跡の上面に広がる焼土層と重複もしくはその下位から検出されたピットのことである。以下、同様である。

遺物は、小型の鉢形土器・約1cm×0.5cmの銅製品片（器種不明）等で、出土量は他の住居に比べ少なかった。

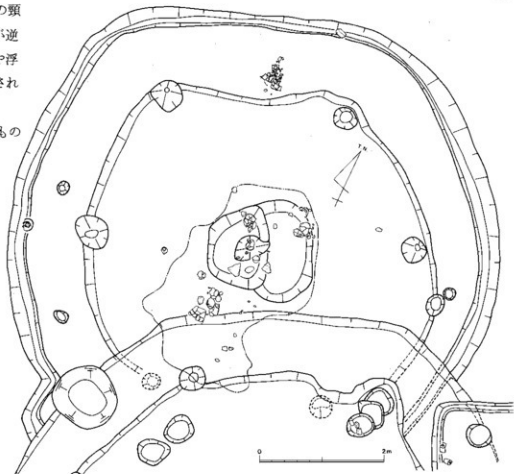
庄内併行期のものと考えられる。

SBNb04

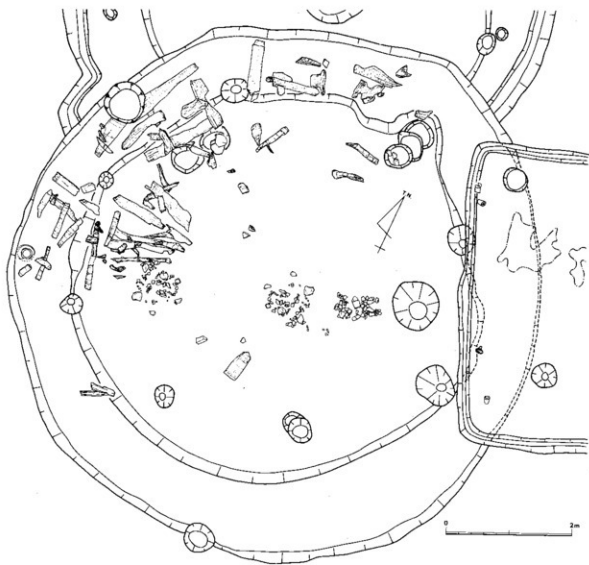
南側をSBNb05によって切られているが、遺存状態の良好な円形に近い不整六角形の竪穴式住居である。東西7.8m・南北6.6mを、床面までは約68cmを測る。また南西部分には張り出し部をもち壁溝も認められるが、SBNb05によって切られ詳細は不明である。壁溝・ベット状遺構をもつ。柱穴は6穴である。床面はほぼ中央部から南寄りに長軸約3.3m・短軸2.6m・厚さ最大約15cmの焼土・炭化物混土層が認められた。その下位より炉跡および焼土ピットが検出された。

遺物の出土状態は、焼土・炭化物混土層下位を中心に、壺・甕・鉢形土器が検出された。また西壁際には、壺形土器の頸部より上半部分が逆位で床面よりやや浮いた状態で検出された。

庄内併行期のものと考えられる。



第5図 SBNb04



第6図 SBNb05 炭化材・遺物出土状況

SBNb05

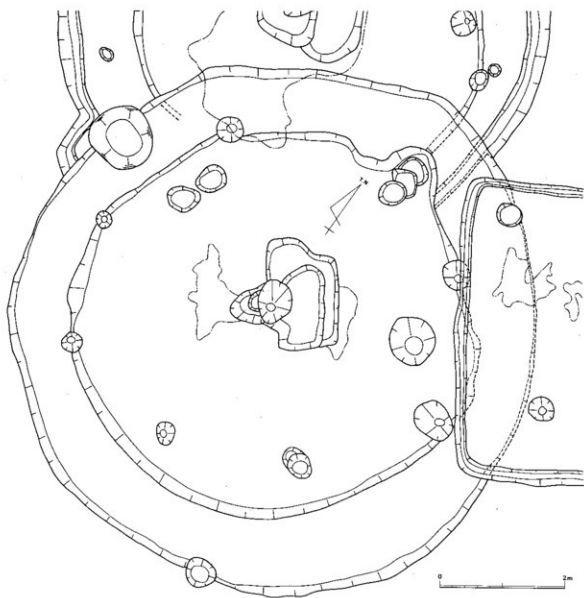
SBNb04を切って設けられた径約8.5mの不整形を呈する堅穴住居である。径約1mの攪乱坑がある。遺構確認面から床面までは約58cmを測り、ベット状遺構をもつ。柱穴は8穴確認され、床面東寄りには、径約76cm・深さ約47cmの円形のピットが検出された。

本住居は焼失家屋と考えられ、炭化した部材が検出され、壁面も赤変し硬化していた。炭化材は、北西側に偏在しており、南側及び東側ではまったく認められなかった。また炭化材は、板状・丸太状・薬状のものが認められ、それぞれ壁材・垂材・屋根材と推定され、この時期の堅穴住居の上屋構造を考える手懸りになるものと考えられる。但し、炭化材の偏在するあり方の原因については、直ちに結論を導き出すことは出来ないが、住居が廃絶され、上屋構造の崩壊がある程度進んだ後、焼失した可能性も考えられよう。

床面中央部に炉をもち、焼土ピットを併設する。また炉の西側では、焼土化した床面が広がる。

遺物は炉の東側を中心に検出され、壺・甕・鉢形土器が認められた。また、SBNb04と同様変形土器

の頸部より上半部が逆位の状態で西側の壁際で検出された。このような出土状態が意図的なものなのか今後検討を加えて行きたい。現在までの調査の結果からこのような出土状態を示す住居はSBNb04と本住居の2例のみである。



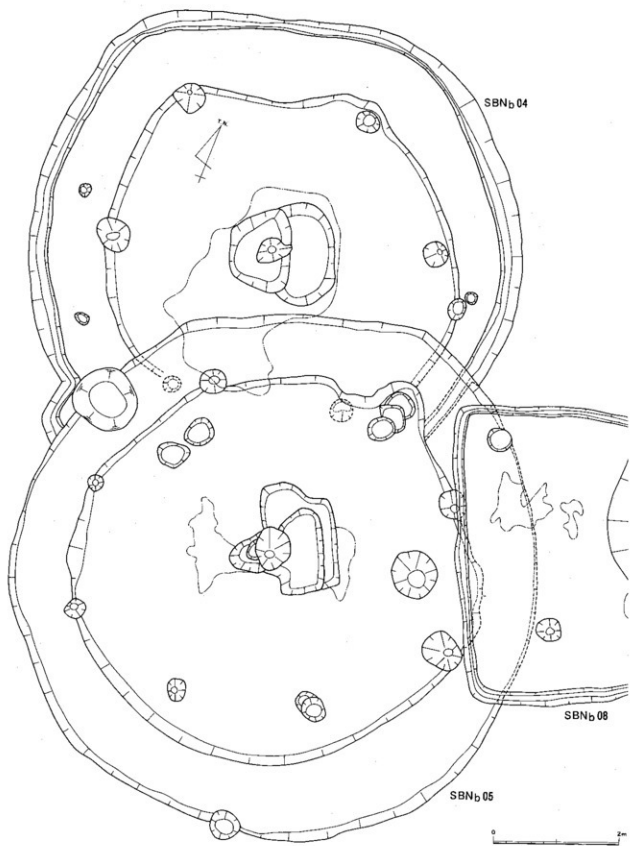
第7図 SBNb05

SBNb01

東西7.3m・南北6.6mを測る不整形形で張り出し部をもつ竪穴住居である。南側は後世の大溝によって、また東側はSBNb07によって破壊されている。遺構確認面から床面までは約35cmを測り、壁溝・ベット状遺構をもつ。柱穴は9穴を数える。床面のはぼ中央部に炉をもち、深さ約50cmの焼土ピットが検出された。焼土ピットの覆土の上位には、焼土・炭化物が含まれていた。

遺物は、壺・甕・鉢形土器・鉄斧等が炉の南側を中心に広がり、また東壁際では、砥石が1点検出された。

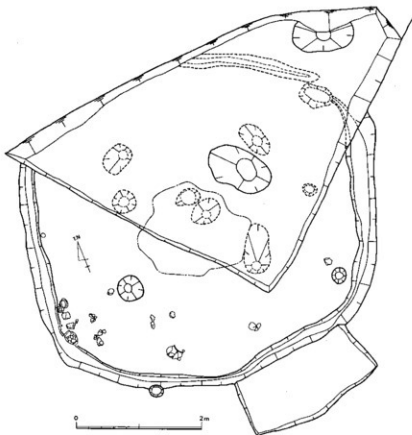
庄内併行期のものと考えられる。



第 8 图 SBNb04·SBNb05·SBNb08 平面图

SBNa11

1辺5.5m程の隅丸方形の堅穴住居と思われ調査区内の隅丸方形の住居跡の中では、最大規模であるが北部は6C末～7C初頭頃の住居跡(SBNa13)により切られている。住居の主軸は真北から、約13°東偏し、確認面から床面まで34cmの深さを測る。床面中央部に炉跡があり、焼土下位から焼土ピットを2穴検出した。四隅に柱穴を認め、周囲に壁溝が認められた。また、南辺に台形状の張り出し部を検出した。出土遺物は、完形に近い高杯1点、鉢形土器1点外、西壁寄りから、小形仿製鏡を出土している。庄内併行期と考えられる。



第9図 SBNa11-SBNa13

SBNa08

1辺4m強の隅丸方形の堅穴住居と思われるが、北寄りの部分は現在の用水路により切られている。住居の主軸は真北から、約16°西偏し、確認面から床面まで42cmの深さを測る。床面中央部に炉跡があり、焼土下位から焼土ピットを1穴検出した。四隅に柱穴を有する住居と考えられるが、北寄りの部分は切られているため、2柱穴を確認したのみである。

南部床面直上に、厚さ16cm程、わずかに黒褐色土ブロックが混じる淡褐色土層があり、張り床の可能性がある。

SBNa12

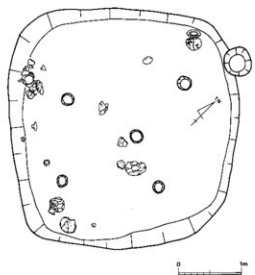
後世の自然河川、現在の用水路・野壺により切られており、残存状況が非常に悪く、プランは不明である。確認面から床面までの深さは48cmであり、ベッド状遺構の存在が推定される。床面中央部に炉跡があり、焼土下位から焼土ピットを2穴検出した。

SBNa01

1辺4m程の隅丸方形の堅穴住居である。住居の主軸は真北から、約15°東偏する。住居の残存状況は良好で、確認面から床面まで58cmの深さを測る。焼失家屋と考えられ、壁面は赤変し焼土化している。住居内には、焼土及び炭化物片を多く認めた。床面中央部に炉跡があり、それをさむように東西に2柱穴を確認した。出土遺物は、北東隅から甕形土器が1点ほぼ完形で出土しているものの、量的には比較的少ない。庄内併行期のものと考えられる。

SBNa02

SBNa01の南東に位置する1辺4m弱の隅丸方形の堅穴住居である。住居の主軸は真北から、約10°西



第10図 SBNa02

偏する。住居の残存状況は良好で、確認面から床面まで56cmの深さを測る。SBNa01と同様焼失家屋と考えられ、壁面は赤変し焼土化していた。埋土中には、焼土が厚く堆積しており、その上位に暗褐色砂質土層、下位に炭化物片（床面直上）が存在する。床面中央部に炉跡があり、焼土下位から焼土ピットを1穴検出し、そのピットを中心として四隅に柱穴を認めた。出土遺物は、西壁寄りから焼土上位・炭化物片下位より高杯1点、鉢形土器3点等がかたまっほぼ完形に近い状態で出土したのをはじめ、北東隅から壺形土器1点、南西隅から壺・鉢形土器各1点、また炉跡付近より甕形土器1点ほぼ完形で出土するなど、量的に多い。庄内併行期のものと考えられる。

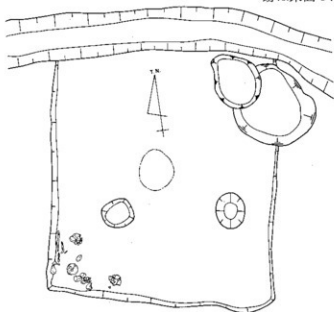
SBNa06



第11図 SBNa06

1辺3m強の隅丸方形の竪穴住居である。住居の主軸は真北から、約11°西偏し、確認面から床面まで38cmの深さを測る。床面中央部に東西に2柱穴を確認した。出土遺物は、板状鉄斧等鉄製品3点、小形の手づくね土器・甕形土器片等出土した。庄内併行期のものと考えられる。

SBNb09



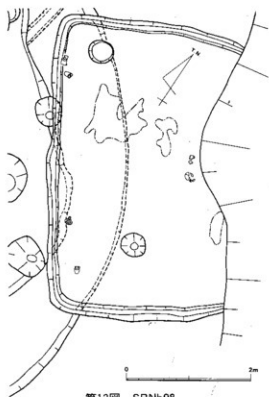
第12図 SBNb09

SDNb04（中世の溝）及び2ヶ所の攪乱堀によって北側を切られ全容は不明であるが、東西3.6m・南北4mを測る長方形の竪穴住居である。確認面より床面までは約19cmを測る。主軸は真北より、約7°西偏する。柱穴は2穴確認できた。炉跡は床面のほぼ中央で検出されたが、床を掘り込むことなく

約65cm×55cmの範囲が赤変していた。上面には4cmほどの厚さの焼土・炭化物の堆積が認められた。

遺物は南西隅から土師器の高杯が3点検出された。

布留期併行期のものであろう。



第13図 SBNb08

SBNb08

SBNb05を切りSDNb05に切られており東半部は不明である。南北4.7m、東西は残存長2.8mを測る方形の堅穴住居である。壁溝をもつ。主軸は真北より約20°西偏する。確認面より床面まで12cmを測る。柱穴は認められなかった。床面に3ヶ所の焼土・炭化物・鍛冶によって生じたと考えられる残滓の分布が認められ、籾の羽目が4点検出された。床面の中央より南西寄りに径約40cm深さ約10cmの炉跡が検出された。炉壁は赤変し著しく硬化しており、炉底面の下位約3cmの厚さまで硬化赤変しているのが確認できた。

上記の状況から、本住居でいわゆる野鍛冶の行なわれたことが考えられるが、炉の構造の細部が不明であり、今後さらに検討を加えたい。

他の遺物は、須恵器の高杯・杯が検出された。

古墳時代後期のものと考えられる。

SBNb07

SBNb01を切り、SBNb06と後世の大溝に切られ遺存状態の悪い堅穴住居である。規模は東西約6.3mを、南北は残存長が3.3mを測る。隅丸方形のプランを呈する住居と考えられる。主軸は真北より約22°西偏する。壁溝及び長軸約2m、短軸1.3m、深さ約18cmの土壇が、またこの土壇の南東部に、焼土を覆土とする径約40cm・深さ約5.5cmのピットが検出された。このピットの壁面は焼土化しておらず、また炭化物も認められず炉とは考えにくい。

後世の大溝によって南半部を失っているので断定できないが、東壁の中央部と考えられる位置に焼土化した粘土塊が認められ、周囲には炭化物・焼土粒が広がっており、その位置からカマドの存在が考えられる。

遺物は、東壁の壁溝上位から須恵器の杯が検出された。

古墳時代後期のものと考えられる。

SBNb06

長軸5m・短軸4.3mを測る南北にやや長い方形の堅穴住居である。SBNb07を切っている。主軸は真北より約23°西偏し、確認面から床面までは8cmを測る。北壁に沿って壁溝が認められた。柱穴は4穴である。住居東壁中央部に径約80cmの炭化物の広がり認められたが、焼土面は検出されず炉跡とは考えにくく、本住居には炉はなかったものと考えられる。

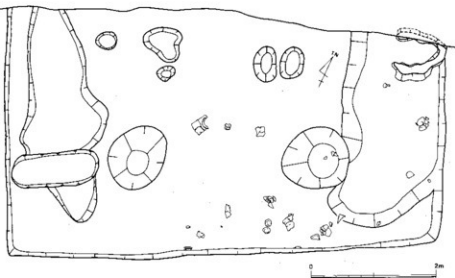
遺物は、須恵器の高杯と土師器の甕形土器の口縁から頸部の破片が検出された。

古墳時代後期のものと考えられる。

SBNa07

1辺7m程の方形の堅穴住居と思われ調査区内の方形の住居跡の中では最大規模であるが、北半は後世の溝・大溝により切られている。住居の主軸は真北から約29°西偏し、確認面から床面まで42cmの深さを測る。東辺中央部にカマドを検出したが、煙道部は確認できなかった。西隅に柱穴を有する住居と

考えられるが、北半は切られているため2柱穴確認したのみである。柱穴は上面の径が1m程あり、他の住居のものとは比べかなり大きい。出土遺物は、竊1点、高杯2点、杯身1点ほぼ完形に近い状態で出土するなど多量に出土した。また、南方中央部より乳白色の石材より作られた勾玉が出土している。6C末～7C初頭頃と考えられる。



第14図 SBNa07

SBNa13

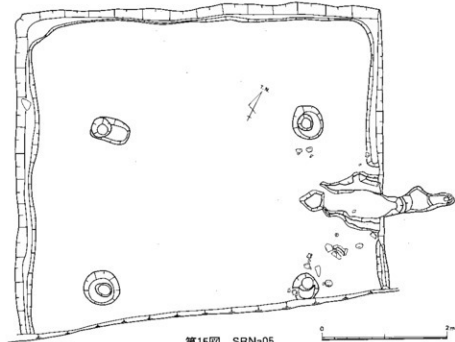
1辺5.5m程の方形の竪穴住居であると思われるが、東部・北部は後世の溝・大溝及び自然河川により切られている。住居の主軸は真北から約40°西偏し、確認面から床面まで40cmの深さを測る。四隅に柱穴を有する住居と考えられるが、東部・北部は切られているため2柱穴確認したのみである。

SBNa04

1辺5m程の方形の竪穴住居である。住居の主軸は真北から約29°西偏し、確認面から床面まで42cmの深さを測る。カマド、柱穴、炉跡等の附帯施設は検出できなかった。

SBNa05

1辺5m程の方形の竪穴住居と思われるが、南辺は調査区外にあたるため未調査である。住居の主軸は真北から約27°西偏し、確認面から床面まで32cmの深さを測る。周囲に壁溝を認め、四隅に柱穴を確認した。東辺中央部にはカマドを検出し、煙道部が屋外に120cm程突出していた。その煙道部は削平を受けており、天井部は検出されなかった。また、煙道口付近には地山が掘り残されており、障壁の可能性がある。燃焼部は焚口まで約80cmで、袖の断面は内側が溝



第15図 SBNa05

曲している。燃焼部の中央付近に径40cm程の皿状にくぼんだ火床を検出した。天井部は焼け崩れており、その下より高杯脚部1点・壺形土器1点出土している。また床直上より、完形の杯蓋1点・碗・甕形土器片等が多量に出土しており、6C末～7C初頭頃と考えられる。

SBNa03

1辺5m程の方形の竪穴住居と思われるが、南半は調査区外にあたるため未調査である。住居の主軸は真北から約22°西偏し、確認面から床面まで46cmの深さを測る。北辺中央部にカマドを検出し、煙道が80cm程突出していた。また、西壁及び東壁に壁溝が認められた。四隅に柱穴を有する住居と考えられるが、南半は調査区外であるため2柱穴確認したのみである。床面直上に厚さ6～8cm程暗褐色土層があり、張り床の可能性がある。遺物は、カマド焼土内より須恵器杯1点、甕形土器片数点出土している。6C末～7C初頭頃と考えられる。

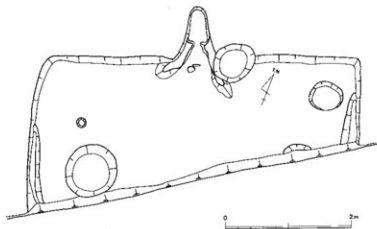
SBNa09

1辺2m程の方形の竪穴住居であり、調査区内で最小である。住居の主軸は真北から約25°西偏し、確認面から床面まで28cmの深さを測る。四隅に柱穴を認めた。

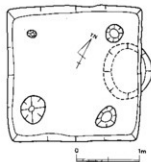
SBNa10

1辺2m程の方形の竪穴住居と思われるが、北半は現在の用水路により切られている。住居の主軸は約26°西偏し、確認面から床面まで10cmの深さを測る。西側に位置するSBNa09と規模・主軸とも近似しているので、SBNa09と同一時期であった可能性がある。

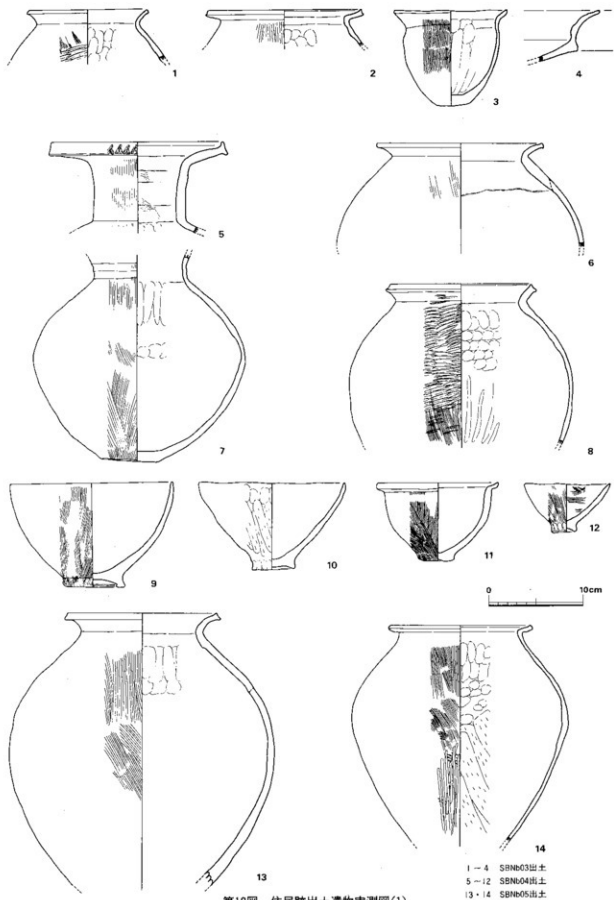
(安藤・松原)



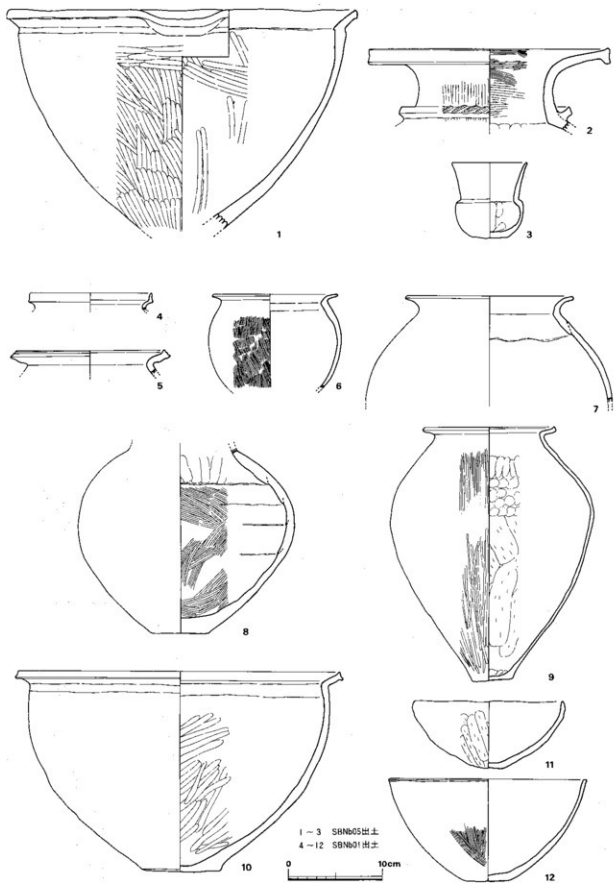
第16図 SBNa03



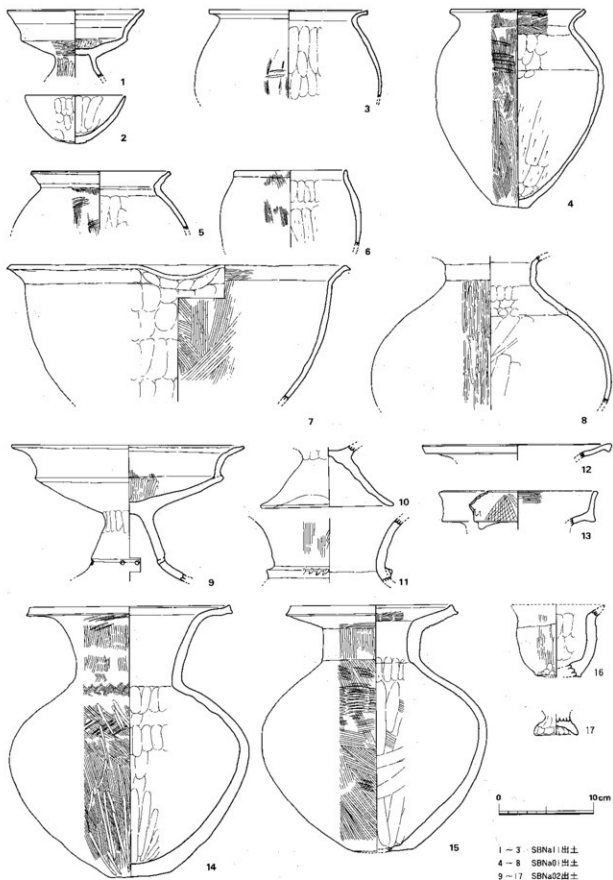
第17図 SBNa09



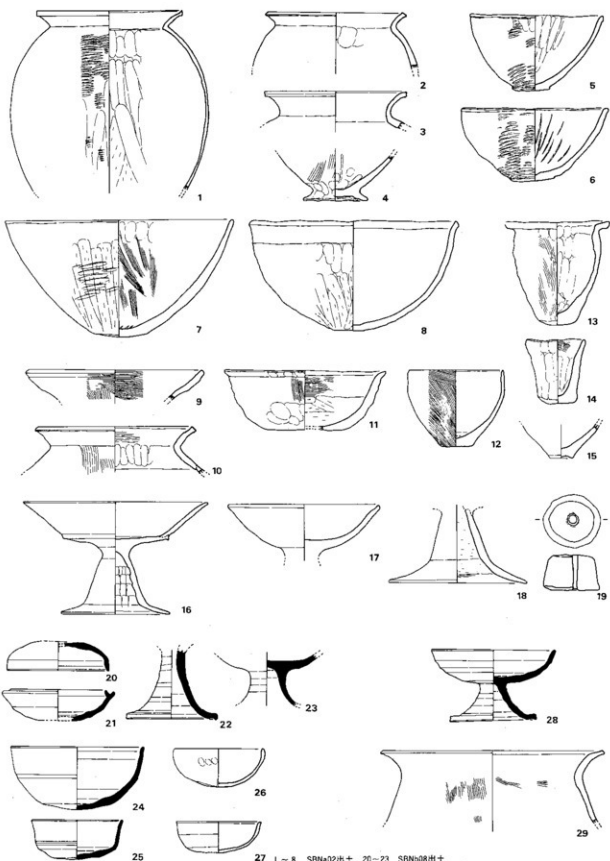
第18図 住居跡出土遺物実測図(1)



第19圖 住居跡出土遺物実測図(2)

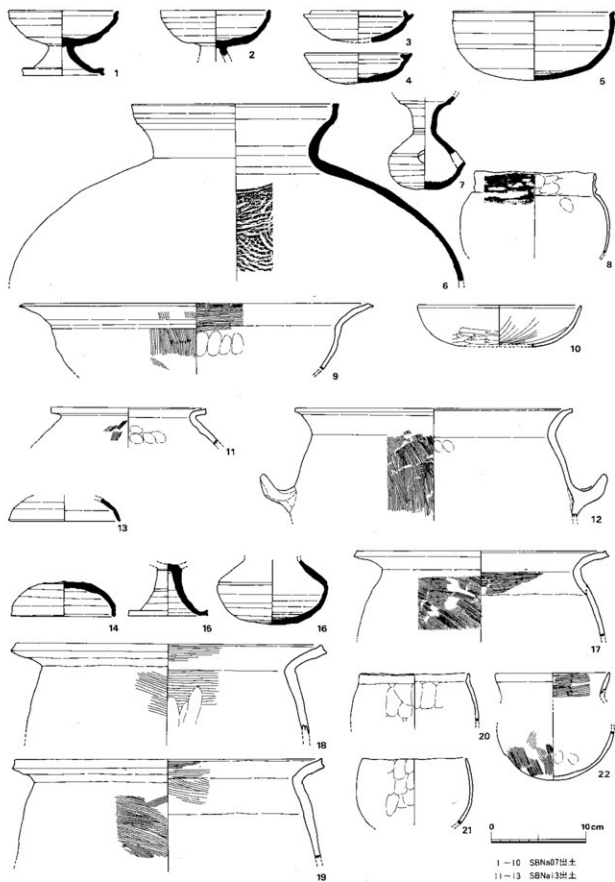


第20图 住居跡出土遺物実測図(3)



27 1-8 SBNa02出土 20-23 SBNb08出土
 9-15 SBNa06 出土 24-27 SBNb07出土
 16-19 SBNb09出土 28-29 SBNa06出土

第21圖 住居跡出土遺物実測圖(4)



第22図 住居跡出土土物実測図(5)

3. Na. b区出土遺物

1～4 (第18図) SBNb03出土のものである。

1は外面に荒い叩き目が認められる甕。2は播磨系^Ⅱの甕。4は大形の高杯の杯部で、内面に凹線状の凹みが数条認められる。

5～12 (第18図) SBNb04出土のものである。

5, 6は壺で, 5は櫛状の工具で口縁部外面に刻目を施す。7, 8は甕で, 8の外面には叩き目が認められる。9～10は鉢で外面に篋削りが認められるものもある。

13, 14 (第18図)・1～3 (第19図) SBNb05出土のものである。13, 14は甕である。

13は外面に叩き目は残らず刷毛により消す。14は播磨系の甕で, 外面は刷毛により調整。1は片口鉢。3は頸部に貼付突帯を有し, 櫛状工具により刻目を施す。3は上位埋土中出土の小形丸底壺である。

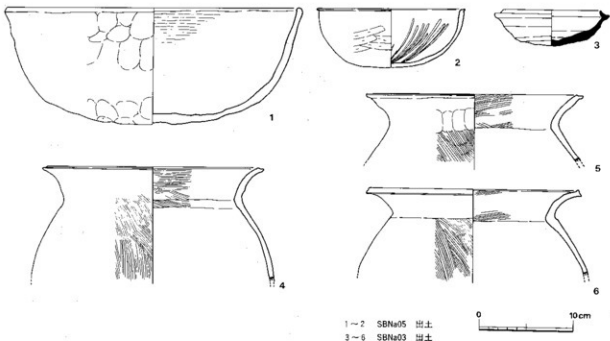
4～12 (第19図) SBNb01出土のものである。4は酒津系の甕の口縁部で口縁外面は横ナデ調整による。櫛状工具による平行沈線は認められない。7はSBNb04の第19図7と類似した器形のものであるが口縁端部の肥厚は認められない。9は播磨系の甕であり, 肩部には横ナデ状の細かな条痕が縦方向に認められる。11の鉢の外面には篋削りが認められる。

1～3 (第20図) SBNa11出土のものである。1の高杯は播磨系とした甕と共通した堆土及び調整が認められる精良なものである。

4～8 (第20図) SBNa01出土のものである。4の甕には外面に叩き目, 胴部内面下半には篋削りが認められる。7は片口鉢である。

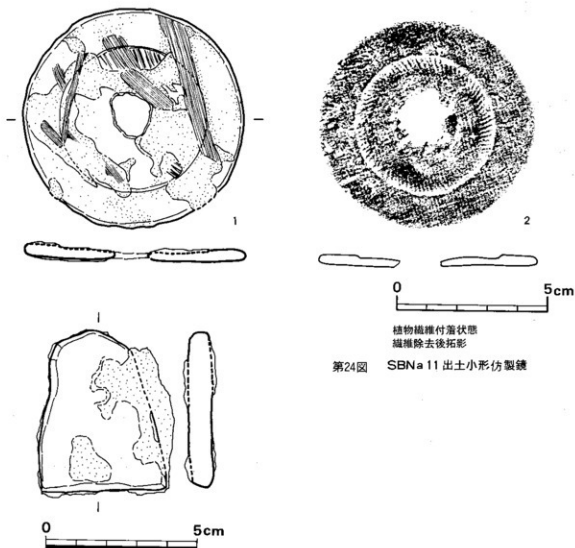
9～17 (第20図), 1～8 (第21図) SBNa02出土のものである。14, 15の壺の外面には叩き目が残る。厚手のものである。13の壺には鋸歯文が認められる。17は製塩土器の脚である。1の甕の胴部外面には叩き目をナデで消す。7, 8の鉢の外面には篋削りが認められる。

9～15 (第21図) SBNa06出土のものである。13, 14は器面に指頭痕が顕著。



第23図 住居址出土遺物実測図(6)

- 16～19 (第21図) SBNb09出土のものである。16は杯部が直線的に開き、17は丸味を有する。これまでの時期の高杯とは明確に異なる。19は紡錘車である。
- 20～23 (第21図) SBNb08出土の須恵器である。
- 24～27 (第21図) SBNb07出土のものである。24, 25は須恵器碗、26, 27は土師器碗である。
- 28, 29 (第21図) SBNb06出土のものである。28は須恵器高杯、29は土師器長胴の甕。
- 1～10 (第22図) SBNa07出土のものである。1～7は須恵器、他は土師器である。8は製塩土器。
- 11～13 (第22図) SBNa13出土のものである。この住居がSBNa11を切っていたため混入したと考えられる。13は須恵器杯。
- 14～22 (第22図)・1～2 (第23図) SBNa05出土のものである。14～16は須恵器、他は土師器である。20, 21は製塩土器であろう。
- 3～6 (第23図) SBNa03出土のものである。3が須恵器、他は土師器の長胴甕である。



切り合い関係があったSBNb04とSBNb05の間には、同一系譜上と考えられる甕で外面の調整が異なるものが含まれる。前者第18図8は叩き目を残し、後者第18図13では叩き目を刷毛目で消している。また古墳時代後期の堅穴住居跡出土の土器には長胴のものを中心とした甕の口縁部に2種類認められる。SBNa03, 07, 13, SBNb06には口縁端部内面を水平に面取りしたものが、SBNa05には口縁端部には口縁と直交するように斜めに面取りしたものが認められる。前者の住居跡から出土した須恵器には胎土中に黒色粒を多量に含むものが認められ、後者にはそれが少ない。住居城の東側の自然河川出土の遺物中には、水平に面取りした口縁端部を有する甕は極少量しか含まれない。確実なものは1点のみである。また須恵器で胎土中に黒色粒を多量に含むものも少なく、全体の5%程でしかない。

注 兵庫県揖保郡川島立岡遺跡の第20溝の遺物と類似するもので、香川県下の各所の同時期の遺跡で類例を見る。非常に精製された薄手の土器で、胎土中に金雲母を含み、色調は暗赤褐色を呈するものが多い。通称「播磨系」と呼んでいるため、本文中でもこの名称を用いた。

小形仿製鏡（第24図）

庄内併行期の堅穴住居SBNa11から出土したもので、直径7.3cm、縁の部分で厚さ4mmを計る。鈕が欠落し、穴があく。外から平縁-斜行櫛歯文-銘帯部-内行花文部-鈕（欠落）となる。鈕の欠落を除いて完形であるが、背文の残存状況は良くない。銘帯部の文様は不鮮明であるが、数ヶ所に沈線状の凹みを数条5mm幅ほどで確認できる。銘帯の図案化が進んだものであろう。花文部では、2弧確認でき、浮彫によるものである。弧文が均整であると仮定すると8弧になろう。鏡の表裏には稲葉と^{註1}考えられる植物繊維が附着。文様構成の類似するものとして、岡山県岡山市百間川原尾島遺跡土坑84、岡山県山陽町^{註2}便木山8号土塚墓付近出土のものがある。

注1. 岡山県教育委員会「百間川原尾島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56, 旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅴ』1984

注2. 山陽町教育委員会「便木山遺跡」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』(2)1971

4. 小結

国道11号線の北部で検出された堅穴式住居跡は、総数22棟である。住居の形態からすれば、Nb区と呼んでいる北寄りの調査区を中心として、円形の平面プランを有する堅穴住居跡、またNa区と呼ぶ南寄りの調査区では方形～隅丸方形の平面形を有する堅穴住居跡が多く検出された。集計すると円形もしくはそれに準じると考えられる堅穴住居跡が4棟、隅丸方形もしくはそれに準じるものが6棟、方形のもの11棟、不明のものが1棟である。

時期的には円形の平面プランを有するものは庄内式併行期の土器を持ち、隅丸方形の平面プランを有する住居跡は庄内式併行期～布留式の土器を出土する。円形の堅穴住居跡の中には切り合い関係が認められるものもあるが、検出された土器からすると、若干の様相の差は認められるものの、時期的にそれほど隔たったものではなさそうである。隅丸方形の平面プランを有する堅穴住居跡は、SBNb09をのぞいて、庄内式併行期の土器を含むが、SBNb09だけは、布留式の高杯を有する。方形の平面プランを有する堅穴住居跡は、作り付けのカマドを持つものが目立ち、隅丸方形の堅穴住居とは異なり、各辺が直線的で、直角に近いコーナーからなる。方形の堅穴住居跡はSBNa04をのぞいて、いずれも6世紀末～

7世紀初頭の須恵器を遺物として含む。

方形もしくは隅丸方形の竪穴住居跡は、住居の方位を明らかにすることができる。ここで言う住居跡の方位とは、竪穴住居跡の入り口等の構造的な方位ではなく、方形の平面プランの一边の示す方向の中で真北を中心として、それに最も近い方位のことを意味する。そのため円形若しくは、平面プランが不明のものは方位を計測することができない。集計すると方形の平面プランを有する竪穴住居跡は、6世紀末～7世紀初頭の時期の所産であるが、 $N-7^{\circ}-W \sim N-40^{\circ}-W$ の範囲に収まる方位を有する。これに対して、庄内式併行期から布留式期の時期の所産である隅丸方形の竪穴住居跡は、 $N-15^{\circ}-E \sim N-16^{\circ}-W$ の方向を有しており、両者の方位の分布範囲には明確な差異が認められる。竪穴住居跡の方位は当時の自然地形の制約もしくは、隣接する自川河川の方位など何らかの基準で決定されると考えられるが、この形態の異なる竪穴住居跡の方位の差は、その原因を含めて注目される。

竪穴住居の平面形態の差と出土した土器との間に、前述した傾向と一見異なるものが1棟だけ認められる。竪穴住居SBNa04からは、遺物量は非常に少ないが庄内式併行期の土器片を検出した。にもかかわらず、平面プランは、明確な方形を呈し、方位も他の方形の6世紀末～7世紀初頭の時期の所産である竪穴住居跡と合致する。しかし、SBNa04はカマドや炉跡が認められず、柱穴もそれほど明確ではない。しかも遺物出土量も少ないなど、通例の住居跡として使用されたかどうか疑問が残るものであった。またすぐ北側に隣接する小形の竪穴住居跡SBNa09が方形プランを呈し、須恵器の甕の破片を埋土中に含み、SBNa04と西側の辺がほぼ同一線上に並び、両者の間隔がSBNa09の一边の長さとはほぼ一致するなど、両竪穴住居跡の間には共通した要素を抽出することができる。こうした点からするとSBNa04は、遺物こそ庄内式併行期の土器片が出土したものの、時期的には6世紀末～7世紀初頭の所産である可能性が高い。

この調査区の竪穴住居跡群では、弥生時代後期末～古墳時代前期の時期と古墳時代後期のものでは、竪穴住居跡の平面形の変化、及び基準方位の変化を読みとることが可能なのである。

国道から北の調査区で検出された竪穴住居跡を、遺物等からまとめると、大きく3時期に、また切り合い関係などを加味すると、5時期に区分することができる。庄内式併行期の円形の竪穴住居跡間の切り合いで、2小期を認めることができるが、出土土器には若干の差異を認めるのみである。

この庄内併行期の住居群の構成をみると、床面積40～50㎡ほどの規模の大きな円形プランを有するものと規模の小さな隅丸方形のものからなる。隅丸方形の竪穴住居跡間にも差異が認められる。床面積も7～24㎡前後と差がある。この中で最も規模の小さな竪穴住居跡であるSBNa06には、炉跡が認められない。また隅丸方形のもので最も規模の大きなSBNa01は、他とは異なり4本柱で、南側に方形の張り出し部を有する。

SBNa06は、最も小規模である点と炉跡を持たないことからすれば、倉庫の機能を有していた可能性も考えられる。隅丸方形の竪穴住居跡でもSBNa01と02は、近接した位置にあり、いずれも焼失家屋で炉を有する。特にSBNa02は、甕・壺・鉢・高杯と土器の器種も豊富で量も多い。焼失家屋であるため土器量が多いことは充分考えられるが、住居として機能していたことは疑いない。

以上の点をまとめると、当遺跡では庄内併行期には、規模の大きな円形住居とやや小規模の隅丸方形の住居と同時併存し、円形のは北寄りに、隅丸方形のものは南よりに位置するように配置され、平面形の異なる住居が同時に存在していたと考えられる。また隅丸方形で最も小規模なものは、炉がなく倉庫的な機能を有する可能性がある。住居として機能した隅丸方形のものにも規模の差・柱穴数の差が

あり、小規模なものは南寄りに位置する。

上記の住居群に続く時期のものとして、SBNa09をあげることができる。布留式の高杯を2点有し、隅丸方形の平面プランを有し、中央に炉を持つ。床面積は13.4㎡とやや小規模なものである。現在のところ下川津遺跡では、この時期の竪穴住居としては唯一のものである。調査区の東側で検出された自然河川には、集落域で使用されたと考えられる土器や木器類などが多量に出土したが、布留式期のものはほとんど認められず、この時期には集落規模は、非常に小さかったと推定される。

次にこの地区で確認される竪穴住居跡は古墳時代後期の6世紀末～7世紀初頭の時期のものである。竪穴住居跡の平面形は全て方形のものとなり、規模の大きなものはカマドを有する。カマドの方位は北側か東側に限られている。この期の竪穴住居跡には庄内併行期に認められたのと同様に、住居跡に規模の差が認められる。床面積が推定値のものを含めて、25～40㎡と規模の大きなものに作り付けのカマドを有するものが認められる。また中程度の規模の20㎡程の床面積を有するSBNb08では中央部に鉄サイを含む焼土塊を確認でき、竈の羽口を出土する。小鍛冶遺構の可能性があり注目される。またこの時期の竪穴住居で一辺が2.1mの正方形を呈するSBNa09など非常に小規模で、炉を有しないものも存在する。大・中・小の三つの規模の竪穴住居跡が、それぞれ機能差を有して同時併存していた可能性が高い。こうした様相は庄内併行期のものとそれほど内線的に差はないものとしてできよう。ただし、占地的には、庄内併行期のものが北寄りに、規模の大きな円形プランのものが位置するのに対して、古墳時代後期のものは南よりにカマド付きの規模の大きな方形プランのものが位置する点や方位の差などの差異が認められる。

またこの地区の南半で確認された掘立柱建物群は、竪穴住居跡と同一の確認面であるなど、その所属時期を明確にしにくいものが多い。ただ東側の自然河川から出土した土器が、6世紀末～8世紀のもので、7世紀代のものが大半を占める点などからすれば、7世紀代を中心とする時期の所産である可能性が高い。

(藤好)

註1. 国道11号線のすぐ南側に位置するSa区では、竪穴住居の存在を認めることはできない。Sa区のすぐ南側に位置するSb, e区では庄内併行期と古墳時代後期の竪穴住居跡群が確認されたことなどから、Sa区は旧地形ではわずかな鞍部となっており、住居域としては用いられなかったと考えられる。

2. 今回の概報では扱わなかったが、今年度調査区の南に位置するSc区で、6世紀後半代の竪穴住居跡に、カマド付きのものがあつた。現時点では、下川津遺跡では最も古い例である。

第2節. 国道11号線より南部の調査

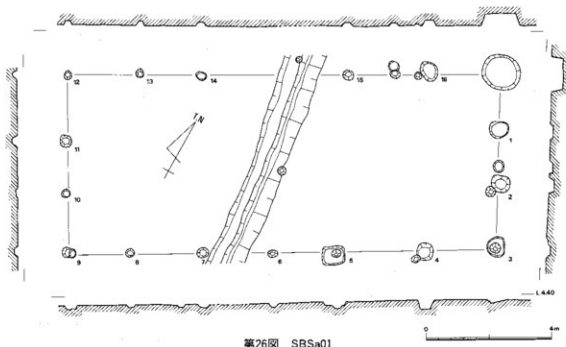
1. 古墳時代より新しい時期の遺構・遺物

Sa区では、古墳時代より新しい時期の遺構・遺物がより顕著に現れた。この項では、それらの概要をこいつまんで報告する。Sa区は、国道の南に隣接して設けた地区で、西の微高地と東の低地の境に農道がある。東の低地については、農道を残す関係でトレンチを設けたのみである。ただ、農道の西側で三角形の現水田が旧地形を反映していたため、この部分については可能な範囲で発掘した。西の微高地では、耕作土、床土の直下から地山・弥生時代前期の包含層があらわれ、その層に掘りこまれた柱穴・土壇・溝等の遺構を検出した。Sa区の北半は、現代にはいって地下げしたとの地元の証言もあり、遺構の遺存状態はあまり良くない。

(i) 建物

SBSa01 (第4図-30)

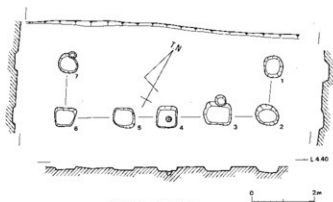
Sa区の北寄りで検出した、6間×3間の建物である。長軸の方向はN-117°-W、規模は長辺13.9m、短辺5.7mを測り、当地区では最も大きな面積を有する建物である。なお、長辺、短辺の長さは、柱根を検出していないものについては、掘り方の中心間の距離で表わした。SDSa03及びSKSa04に切られているため、18穴中16穴しか検出していない。各柱穴の掘り方は規模・形状に大きなばらつきがある。しかし、埋土は全て同様なもの(暗褐色砂質土)で底のレベルも多少ばらつきがあるものの近似している。さらに掘り方の規模について概観してみると、東寄りのものほど大きくなる傾向が見てとれる。冒頭でも述べたが、ここはかなり削平を受けていることを考えあわせると、元来は隅丸方形の掘り方をもっていたが、西寄りほど削平が下まで及んでいて上面プランが不揃いになったとみるのが妥当であると思われる。柱根の状況より、柱には丸材を使用したものと推測できる。なお、10の柱穴内より、弥生時代前期の壺の頸部の破片が出土した。また、8・10の柱穴より焼土塊を出土した。



第26図 SBSa01

SBSa02 (第4図-29)

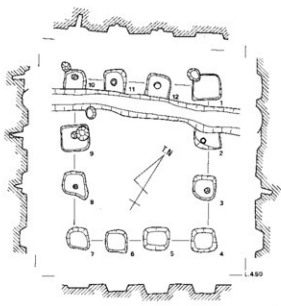
Sa区の西寄り北端で検出した、4間×2間以上の建物である。長軸の方向はN-120°-W、南辺の長さは、柱穴の中心間の距離で4.9mを測る。北辺と短辺の北部については、調査区外に展開するものと思われる。各柱穴は概ね隅丸方形の掘り方プランをもち、規模は上場で一辺30cm~43cmである。確認面より底までの深さは4cm~9cmと残存状態は良くない。柱穴から遺物は全く出土していない。



第27図 SBSa02

SBSa05 (第4図-31)

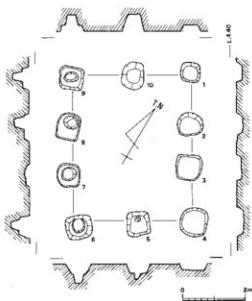
Sa区の中央やや東寄りで検出した3間×3間の建物である。長辺の方向はN-30°-W、長辺5.1m、短辺4.3mを測る。各柱穴は一辺34cm~46cmの隅丸方形の掘り方プランをもち、2、3、8~12の7穴から柱根を検出した。5の柱穴からは炭化物を円形の上面プランを呈した形で検出した。柱根の可能性が高い。2、10~12の4穴が浅い溝状遺構であるSXSa01に切られている。これらの柱穴は弥生時代前期、後期の包含層に埋り込まれていることから、弥生土器片、サヌカイト片が出土した。11より須恵器小片も出土している。



第28図 SBSa05

SBSa09 (第4図-32)

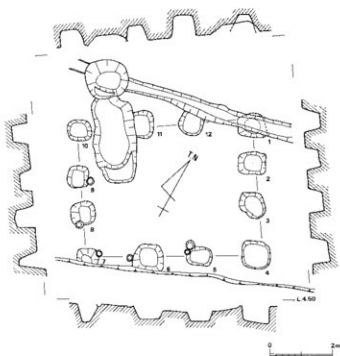
SBSa05の南に軒を並ぶように接して検出した2間×3間の建物である。長軸の方向はN-31°-W、長辺4.34m、短辺3.90mを測る。南北方向の辺はSBSa05の南北辺とはほぼ同一直線上にある。各柱穴は一辺34cm~44cmの隅丸方形の掘り方プランをもち、5~9の5穴より柱根を検出した。2、3、4、6、7、9の6穴より弥生土器片、サヌカイト片が少量出土した。なお、6の柱穴より須恵器杯蓋の破片が出土している。



第29図 SBSa09

SBSa08 (第4図-34)

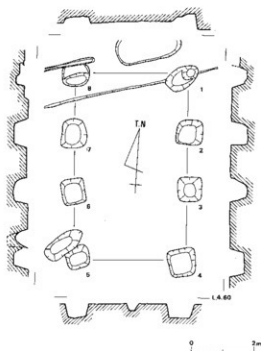
Sa区の中央やや東寄りの南辺で検出した3間×3間の建物である。長軸の方向はN-120°-W、長辺5.5m、短辺4.2mを測る。東側の短辺はSBSa09、SBSa05の西側の長辺を結ぶラインの延長と概ね重なっている。各柱穴は一辺30cm～50cmの隅丸方形の掘り方プランをもつ。確認面から底までの深さは最大36cmと遺存状態は比較的良好である。1、12の柱穴はSDSa08に切られており、11はSXSa(近世の土塚)に切られている。また、12穴全てが弥生時代前期の遺物を包含する浅い凹み(SXSa24)に掘り込まれ、3、6は弥生時代前期と思われる柱穴状ピットを切っている。柱穴内出土の遺物はコンテナ1箱程になったが、その殆どが弥生土器片、サヌカイト片である。



第30図 SBSa08

SBSa07 (第4図-33)

Sa区の南西隅で検出した1間×3間の建物である。長軸の方向はN-9°-W、長辺6.2m、短辺3.4mを測る。各柱穴は一辺36cm～46cmの隅丸方形の掘り方プランをもつが、掘り方の辺の方位はばらばらで整然とはしていない。柱穴の確認面から底までの深さは深いもので55cmと遺存状態は比較的良好である。柱穴より出土した遺物は小片ばかりながらコンテナ1箱程になる。須恵器、土師器、弥生土器、サヌカイトの小片が大半を占めるが、7の柱穴より畿内産の瓦器の小片が1点出土している。



第31図 SBSa07

SBSa04 (第4図-28)

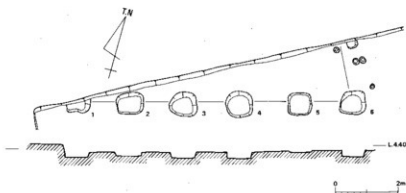
Sa区の北西隅で検出した5間×1間以上の建物である。長軸の方向はN-105°-W、南辺の長さは8.8mを測る。北辺と南北辺北部は調査区外にひろがるものと思われる。各柱穴は一辺36cm～43cmの隅丸方形の掘り方プランをもち、確認面より底までの深さは4cm～19cmと残存状態は良くない。1の柱穴より土師器、サヌカイト片、4より蟾壺、須恵器のそ

れぞれ小片が出土している。

(ii) 土 塚

Sa区では20基程度の土塚及び土塚状の遺構を検出した。削平も影響してか発掘区の南半分が多く検出している。うち、17基から遺物を出土している。その殆んどには染付等が混在しており、掘削時期は近世まで下るものが多い。

その中で、炭と蛸壺を多量に出土した土塚状の遺構が特筆べきものとして挙げられるので紹介しておく。

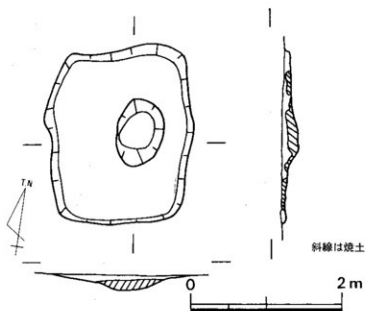


第32図 SBSa04

SXSa07 (第4図-50)

Sa区の南西隅で検出した長軸2.3m、短軸1.8mの隅丸長方形のプランをもつ土塚状の遺構である。確認面から底までの深さは端の方では約5cmと極めて浅いが中央部は摺鉢状に深くなり、最大深度は20cmである。底、肩は厚さ10cmにわたって赤褐色に変色した部分があり、さらに埋土中に炭化物も多くみられ、火の使用が考えられる。遺物は、上位より蛸壺28点、須恵器杯蓋2点、土師器2点以上を出土しているが、蛸壺の数量が目をはく。これらは全て「イイダコ」釣りに用いる小型のものである。火の使用の痕跡があることから、蛸壺を焼成した土塚とも考えられたが、他の遺物の混入、蛸壺の完形品が多いこと等から、その可能性は小さいとみた方がよい。なお、

SXSa07の周囲には南を除いて3方を取り巻くように幅35cm深さ5cmの溝状遺構がめぐる。さらにSXSa07の長軸の方向はSBSa07の長軸とほぼ同一方位を示すことから、両遺構の関連性も考えられる。



第33図 SXSa07

(四) 溝状遺構

SDSa03 (第4図-40)

Sa区の中央やや西寄りを南北に走りSDSa01とはほぼ垂直に合流する断面がゆるやかなV字形を示す溝である。確認面で幅1.1m、深さ0.35mの規模を測る。埋土は2層に分層できるが、遺物の接合関係からみて上下の層の間の時期差は認められない。

SDSa01, SXSa10 (第4図-41)

Sa区を東西に縦断するように走る溝である。断面形は逆台形を2枚重ねたような形で、底が二段になるところがあるが、概ねV字を示す。確認面で幅1.2m深さ約0.5mを測る。SDSa03との合流点が不定形な広がりを持ちそれぞれ時期差をもつ可能性があったため、この広がりをSXSa10と呼称して調査を進めたが、整理の結果SDSa01, SDSA03, SXSa10出土遺物が数点接合したため、これら3つの遺構は同時期のものとみてよいものと思われる。

SDSa01, SDSA03, SXSa10の出土遺物は、全部でコンテナ10箱分程である。うち食器類として、土師質土器碗60点、皿136点、黒色土器(内黒)碗59点、皿1点、黒色土器(内外面黒)碗4点、緑釉陶器碗3点が出土している。土師器の大型器種でみると、甕23点、土鍋7点、羽釜60点となる。その他、蜻蛉6点、かまど3点、土錘2点、瓦8点がある。須恵器はコンテナ2箱程度出土しているが、甕、鉢の破片が中心で、個体数は相対的に少ない。なお上記の数量は、破片については食器類は底部の数量、大型のものについては口縁部の数量を示したものである。

なお、Nb区・Na区の東端に、落ちに沿うように溝状遺構が検出されている。その最も北寄りで不定形に広がる部分(SXNb02-第4図-49)があり、緑釉陶器の耳皿(完型)が出土しており、またそこから西へ伸びる溝(SDNb04-第4図-35)からも緑釉陶器片が出土している。このことから、SDSa03の延長若しくは時期を同一とする遺構と考える。

SDSa08 (第4図-48)

Sa区の南寄りの水田の地境に交りつつ東西に走る断面コの字型の溝である。西部については、地境のコンクリートの基礎工事によって破壊されていた。確認面で幅0.2m、深さ0.2~0.4mを測る。遺物は全体でコンテナ1/2箱分程出土している。内容は、サヌカイト片、石鏃、弥生土器片、土師器片、須恵器片と多様であるが、最も新しいものとしては、瓦器片が1点出土している。この溝はSBSa08の柱穴を切っている。

SDSa04 (第4図-45), SDSA06 (第4図-44)

Sa区北東部の段落ちの下の水田の地表下50cm、第7層(黄茶灰色砂質土)上面より地割に平行な方向で検出した2条の溝である。SDSa04は幅0.55m、深さ0.1mを測り、三日月形の断面形を示す。SDSa06は幅1.0m、深さ0.2mの断面逆台形の溝である。2条とも残存状態が悪く、遺物も数点しか検出していない。SDSa06の埋土より畿内産の瓦器の高台部分の破片が1点出土している。

SXSa01 (第4図-43), SXSa02 (第4図-42)

北東部の段落ちに向かって二股にわかれて注ぐ溝状遺構である。北東ほど残存状態が良くなっているが、それでも幅0.6~0.8m、深さ0.1~0.2mと決して残りが良いとは言えない。土層の状況からみてSXSa02の方がSXSa01を切って走るが埋土の状況が酷似しており、上面では切りあいは確認できなかつ

た。SXSa01はSBSa05の柱穴及び弥生時代前期の包含層を切っている。また、段落ち際で深さ0.8mの土域に切られていた。なお、東寄りで底に炭化物が集中する箇所が2ヶ所あったが、切りあいは不明である。SXSa02は南の方でSDSa01に切られ、その南でSDSa02と合流するようにみえたが、合流点付近では遺構の残存状況が5cm以下と極めて劣悪であり、切りあひ等はつかみ得なかった。遺物は全体でコンテナ2箱分程出土している。器種については、須恵器、土師器、弥生土器、サヌカイト片といったところが挙げられるが、弥生時代前期の遺物が他を圧倒している。須恵器は壺、甕の破片が多い。杯身は低い高台をもつもの、杯蓋はかえりをもたないものが若干数みられる。

(v) ビット群

Sa区では、発掘区南半を中心に大小含めて300を越すビットを検出している。この中には、土師質小皿の完型品が埋め込まれていたもの、根石・詰石をもつもの、炭化物がつまっていたもの等特徴を備えるものもいくつかみられた。さらに詳細にみてゆくと建物の棟数の増加も見込まれ、傾向等がより明らかになるものと思われるが、これらについてはSa区の南に接したSe区の調査の進展を待って検討を加えたい。

まとめにかえて

Sa区は、Na・Nb区と微か20mの距離を隔てただけにもかかわらず、全く様相を異にする。即ち、北で密集している庄内併行期～7世紀代の堅穴式住居は遂に1棟も検出せず、掘立柱建物・溝等が検出されたということである。Sa区全体を概観すると、これらの遺構は発掘区西部から中央部にかけての標高4.0m以上の微高地に見られる。なかでも一辺40cm程度の隅丸方形の柱穴をもつ建物群が目目を引く。柱穴から出土した遺物は小片ばかりで建物の時期について遺物からは言及できないが、埋土の特徴や建物のもつ方位から次の3つの群に分類できそうである。

I群 暗褐色砂質土を埋土とするもの……SBSa01

II群 黄灰褐色砂質土の埋土をもち長辺または短辺が北-30°-西の方位を示すもの……SBSa02, 05, 08, 09

III群 黄灰褐色砂質土の埋土をもち長辺または短辺が概ね北を向くもの……SBSa04, 07

これら3つの群がそれぞれ時期差を反映しているかどうかは明らかではないが、一群をなす建物については類似点が多いため、ほぼ同じような時期のものであるとみてよいと思われる。

次に、溝との切り合い関係に目を移すと、SBSa05の北辺の3穴はSXSa01に切られている。さらにSXSa01はSXSa02に切られ、SXSa02はSDSa01に切られている。以上のことから、II群の建物→SXSa01、02→SDSa01という推移が考えられる。さらに、SDSa01とSDSa03は埋土の状況が類似していること及び遺物の接合関係から同時に機能していたとみられ、これが発掘区の中をT字に走るがその方向は概ね真北及びそれに直交する方位を示し、SBSa07、SBSa04のもつ方向と類似している。このことからIII群のいずれかの建物とSDSa01, 03が同時に機能していた可能性も考えられる。

本項の冒頭でも述べたとおり、調査区はかなり削平を受けており、遺構の残存状況は悪く、遺物の出土状況も芳しくない。したがって溝、土域等の時期決定が極めて困難と言わざるを得ないが、比較的まともな出土したSDSa01, 03の遺物について簡単に触れ年代観を与えることにする。

須恵器 甕、鉢の破片が多い。鉢は3点あり、いずれも灰白色の軟質のもので、口縁部が上方にたちあがる特徴をもつ。(第34図1, 2) 第35図3は底部糸切りである。供膳土器については小片ばかりで

あるが、色調が白っぽい薄手のものが多い。第34図8の全面には火髹が認められる。

緑釉陶器 破片のみであるが、杯が4個体ほど出土している。第35図14は断面青灰色の硬陶で、釉調は暗褐色である。第34図7は断面灰白色の軟質のもので、釉調は濃緑色である。これには口縁端部を内側へ押し出した輪花を4ヶ所に施している。

土師質土器 碗と小皿が出土している。小皿は全て底部へラ切りである。第34図19には高台が付く。口径は10cm前後のものが大半を占める。碗は、さまざまな形態を示すが、高台の形態に粘土紐を貼り付けたものと、円板状の粘土板を貼り付けたものの2つのタイプが見受けられる。前者は高く外方へ踏んばるものも多く、貼り付け部分の内側を撫でつけるといった丁寧なものが多い。

黒色土器 黒色土器は大半がA類(内黒)で、その殆んどが碗である。外形は土師質土器と殆んど差異はない。外面の色調、胎土等にはかなりばらつきがある。全体的に口径が大きく、深さもある。器面はかなり摩滅していて判別しにくいものが多いが、殆んどの内外面に丁寧なへら磨きを施しているようである。B類(内外面黒色)の碗も4点出土している。これらも内外面にへら磨きを施す。第34図15・16・17は細かい磨きが無数にある。高台は低い。15は口縁部内端面に沈線状の凹みが一列めぐる。18はやや厚手で暗文の幅が広く、高台は外方に踏んばるもので、上の3点とはタイプを異にするようである。

その他の器種 上記の他に、羽釜、土鍋、蛸壺、かまど、瓦、土錘などの破片が出土している。羽釜には口縁部が強く外反するものが多くみられる。蛸壺は8点中6点が大型のものである。

整理が完了していないため、今後の詳細な検討を要するが、現段階でのSDSa01.03の時期については、①少量ではあるが黒色土器B類が出土していること、②須恵器鉢、広口壺の形態が西村1号窯灰原出土遺物に類似していること、③畿内産の瓦器が下川津遺跡の他の地区で出土しているにもかかわらず、本遺構からは出土していないことから平安時代後期頃の廃絶を考えている。

現在(1986年2月)Sa区に南接する地区及び高木道を挟んで西側の地区を発掘調査中であるが、西側の地区でSa区で検出したものと同様の柱穴規模をもつ建物を確認されている。今後の調査の進展によってさらに詳細な時期、性格等が判明してゆくものと思われるが、そのたき台として現段階で想定している年代観について下に記してまとめにかえたい。

	奈良時代	平安時代	鎌倉時代
溝	SDSa01.02	SDSa01.03	SDSa04, SDSa06
建物	(I群) II群	III群	

註1

高木道を挟んで西接する地区で、柱穴規模・埋土・方向の類似した建物を検出しており、この柱穴の一つより遺存状態の良い須恵器(8C代)が出土していること、瓦器の出土がただ一点であることから、SBSa07の年代を鎌倉時代とするのには疑問が残る。

参考文献

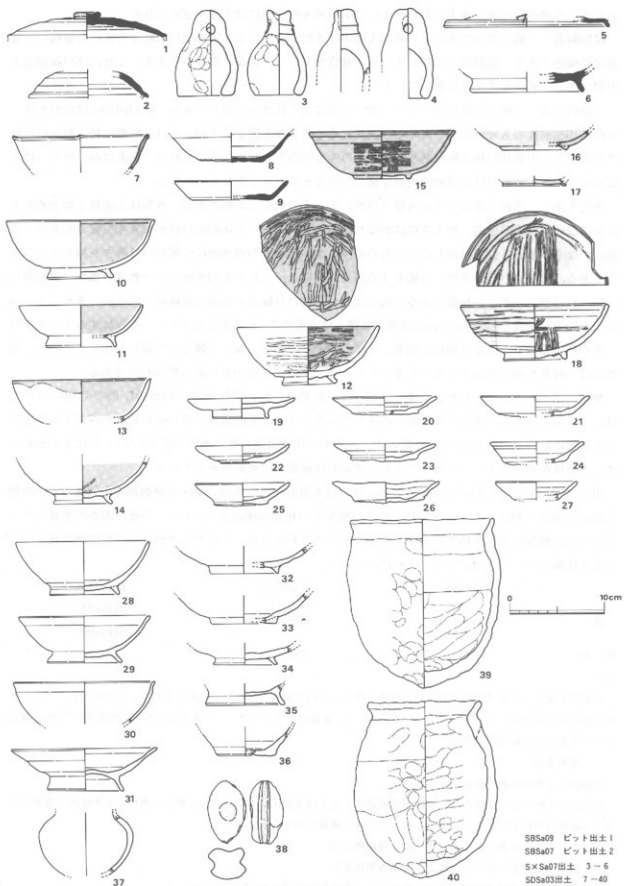
(1)1980. 3 香川県教育委員会『西村遺跡』

灰原出土の軒平瓦の文様が、鳥羽離宮南殿跡出土瓦と同文関係にあるとする見解から西村1号窯跡出土遺物の時期の上限を11世紀末に比定している。最近この説に異論を唱える研究者が多い。

(2)1985. 3 香川県教育委員会・本州四国連絡橋公団

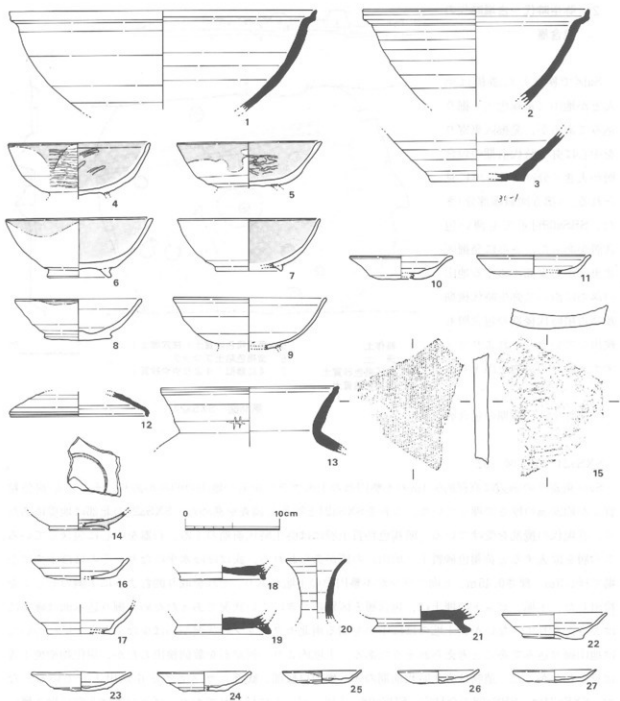
瀬戸大橋建設に伴う『埋蔵文化財調査報告Ⅱ』

下川津遺跡予備調査で遺跡範囲南部の第9トレンチで和泉系の瓦器片を出土している。



SBSa09 ビット出土 1
 SBSa07 ビット出土 2
 S×Sa07出土 3-6
 SDSa03出土 7-40

第34図 遺物実測図



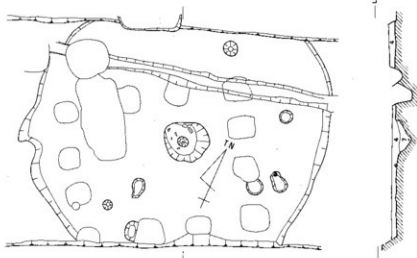
- | | | | | |
|---------------|--------------|--------|-------|------------|
| 1-11 | SDSa01出土 | 22 | SP146 | } Sa区ビット出土 |
| 12-14, 16, 17 | SXSa10出土 | 23, 24 | SP159 | |
| 15 | SDSa01, 03出土 | 25-27 | SP275 | |
| 18-21 | SXSa01, 02出土 | | | |

須恵器・断面ぬりつふし 黒色土器・焼しの部分を灰色
 土師質土器・断面白ヌキ 緑釉陶器・断面灰色
 15は瓦

第35図 遺物実測図

2. 弥生時代～古墳時代の 包含層

Sa区で検出した遺構は殆んどが地山（黄褐色土）掘り込みであるが、発掘区東寄りを中心に弥生時代前期の包含層が大きく分けて2ヶ所に見られる。（第5図斜線部分）また、SBSa09付近でも薄い包含層があった。さらに発掘区北東部から東部へめぐる地山の落ちに沿って弥生時代後期及び古墳時代後期の包含層も検出している。これよりコンテナ6箱分の遺物を出土した。



- | | |
|----------|-----------------|
| 1 耕作土 | 5 黄茶褐色砂質土（柱穴埋土） |
| 2 床土 | 6 黄褐色粘土ブロック |
| 3 暗褐色砂質土 | 7 4に類似（4よりやや砂質） |
| 4 暗褐色粘質土 | |

0 2m

(i) 弥生時代前期の包含層

第36図 SXSa24

SXSa24（第4図-52）

Sa区東寄りの南辺に直径約9.4mの不整形形の上面プランをもつ地山の凹みがあり、そこに暗褐色粘質土が約20cmの厚さで埋っていた。これをSXSa24と呼称し調査を進めた。SXSa24の北部は地境にあたり、近現代の攪乱を受けている。暗褐色粘質土層には弥生時代前期の土器、石器を中心に包含している。この層を除去すると黄褐色砂質土（地山）の底があらわれる。底はほぼ水平になり、そのほぼ中央に上場で径1.3m、深さ0.45m、上面プランが不整形形の土塚があり、それを取り囲むように7個のピットを検出した。土塚、ピットの埋土は、包含層と区別のつきにくい状況であったため、掘り込み面は確実にしておさえられていないが、土塚のほぼ中央を切る南北セクションの状況からは少なくとも土塚については地山掘り込みであると考えられそうである。土塚内より、河原石を数個検出したが、炭化物や焼土等は見られなかった。遺物は弥生時代前期の壺、甕の口縁部、底部、サヌカイト片が出土している。なお、SXSa24は、SBSa08の全柱穴、SDSa08、土塚、ピットに切られており、プラン等は非常に捉え難い状況であった。

SXSa24と呼称した地山の凹み全体のプランと、その中で検出した土塚、ピットの位置から、堅穴式住居である可能性も考えられるが、凹みの落ち肩がかなり緩やかな傾斜をもちかつ不揃いである、SXSa24内で検出したピットとその外で検出したピットとの差異が明確でないなどの反証も成り立つため、今後のより詳細な検討を要するところである。

SXSa24より北へ20m程離れた地点でも弥生時代前期の包含層を埋土とする凹み（SXSa04）、土塚状の凹み（SXSa05.06）を検出しているが、削平が著しく、プラン・性格等については不明な点が多い。しかし、今回概報する地区ではないが、Sa区の南東に位置するSb区の自然流路に、弥生時代前期の流路が

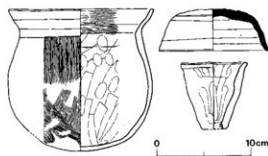
確認されており、この付近で弥生時代前期に人間が活動していたことは確実である。今後の調査の進展が期待される。

(ii) 弥生時代後期及び古墳時代後期の包含層

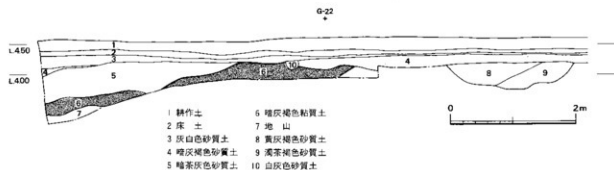
Sa区の東寄りにみられる地山の落ちに沿って落ち方にかぶるように暗灰褐色粘質土の遺物包含層を検出した。この包含層の上には黄灰褐色砂質土（中世）が厚く堆積している。地山の落ちのラインは平滑な曲線は描いておらず、随所に谷状部分のみられ、包含層はこうした箇所ではやや厚く堆積している。また、落ちの斜面に掘り込まれた土塚も南寄りで一基検出しているが、埋土が包含層と酷似しており、掘り込み面は確認していない。包含層出土の遺物は未整理のため詳細には述べられないが、古墳時代後期の須恵器、土師器が大半を占めるようである。しかし、体部外面にタタキ目が顕著に残るものなども見うけられ、弥生時代末～古墳時代初めと考えられそうな土器も少なからず認められる。このことから包含層は時期差をもつ層序に分層できることが考えられるが、下位、地山直上から古墳時代後期の土師器を検出した箇所もあり明確に分層することはできなかった。

Sa区ではこの時期の遺構は認められていないが、Sa区と南接するSb区、Se区で古墳時代後期及び弥生時代末頃と考えられる竪穴式住居が確認されており、Sa区東寄りで検出した包含層にはこれらの遺構との関連が考えられる。

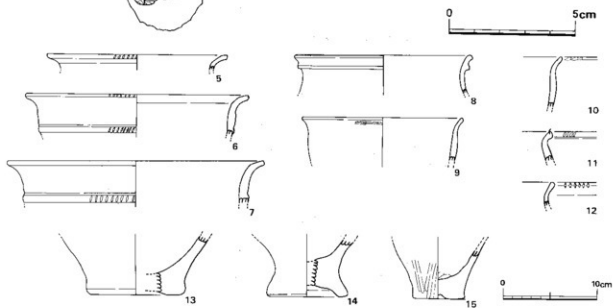
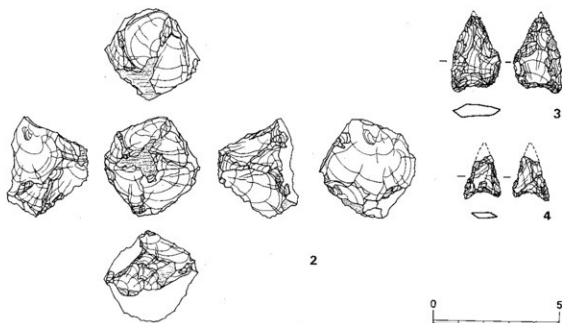
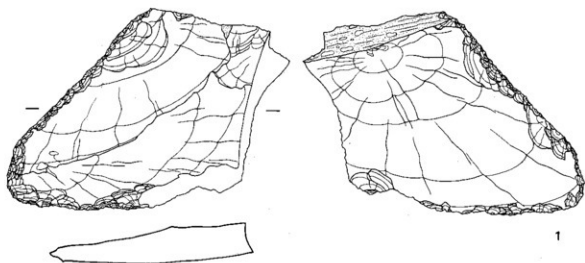
(松野)



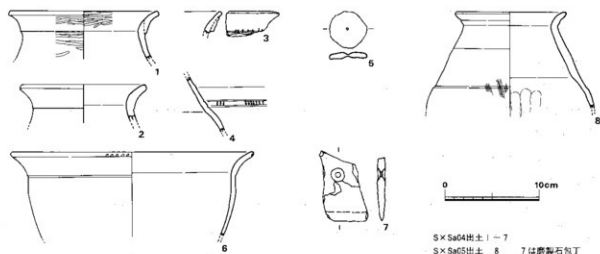
第37図 包含層出土遺物実測図



第38図 F・G-22 南壁土層図



第39图 SXSa24 出土遺物実測図



第40図 弥生時代前期包含層出土遺物

遺構番号	形 上	規模 (m)		主軸方位	床面積 (㎡)		+起穴洞	床面の 残存深 度 (cm)	基礎位置	付属施設	備 考
		長 軸	短 軸		現存	推定					
SBn03	円形	7.7	7.6	—	46.5	—	9 (11)	20	中央	壁溝、ベッド、焼土ビット	
SBn04	円形	7.8	(6.6)	—	44.6	—	6 (10)	68	中央	壁溝、ベッド、焼土ビット	張り出し
SBn05	円形	8.45	8.45	—	53	—	8 (13)	58	中央	ベッド、焼土ビット	焼失家屋
SBn01	不明	7.3	6.6	—	38.3	—	9 (13)	35	中央	壁溝、焼土ビット	張り出し
SBn11	隅丸方形	5.6	5.3	東へ13°	22.6	23.8	4 (10)	34	中央	壁溝、焼土ビット	張り出し南1.9m
SBn08	隅丸方形	(5)	(4.4)	西へ16°	8	15	2 (3)	42	中央	張り床(焼土ビット)	
SBn12	不明	(3.3)	(2.8)	(東へ27°)	6.6	—	1 (4)	48	中央	ベッド、焼土ビット	
SBn01	隅丸方形	4.4	4	東へ15°	14.8	—	2 (3)	58	中央	焼土ビット	焼失家屋
SBn02	隅丸方形	3.8	3.7	西へ10°	10	—	4 (5)	56	中央	焼土ビット	焼失家屋
SBn06	隅丸方形	3.6	3	西へ11°	7.3	—	2	38	—	—	
SBn09	方形	4	3.6	西へ7°	13.4	—	2	19	中央	—	
SBn08	方形	4.7	(2.8)	西へ20°	11.8	—	0 (1)	12	—	—	
SBn07	隅丸方形	(6.3)	(3.3)	西へ22°	14.7	(38)	2 (3)	8	—	壁溝、カマド(?)	
SBn06	方形	5	4.3	西へ23°	20.2	—	4	8	—	壁溝	
SBn07	方形	7	(3.9)	西へ29°	23.5	40.2	2 (7)	42	—	カマド	
SBn13	方形	(4.8)	(4.8)	西へ40°	12.4	30.3	2	40	—	—	
SBn04	方形	4.9	4.9	西へ29°	21.2	—	0 (6)	42	—	—	
SBn05	方形	5.8	(4.9)	西へ27°	26	33.6	4	32	—	壁溝、カマド	
SBn03	方形	5.1	(1.8)	西へ22°	8.4	(25)	2 (4)	46	—	壁溝、カマド、張り床	
SBn10	方形	2	(0.6)	西へ28°	0.8	—	—	10	—	—	
SBn09	方形	2.15	2.1	西へ25°	3.8	—	4	28	—	—	

表2 Na・Nb区 竪穴住居跡一覧

番号	間数	柱間寸法 (cm)		長辺行	短辺行	面積 (㎡)	長軸方向	竪穴プラン	備 考
		長 辺	短 辺						
SBSa01	6 K × 3 K	190~235	170~210	1,390	570	79.1	N-27°-W	—	遺構の残存 層位 (cm)
SBSa02	3K × 2K以上	140~190	—	490	—	—	N-30°-W	隅丸方形	
SBSa04	5K × 1K以上	160~180	—	880	—	—	N-15°-W	隅丸方形	
SBSa05	3 K × 3 K	140~190	120~160	510	430	21.9	N-30°-W	隅丸方形	
SBSa07	1 K × 3 K	180~220	340	620	340	21.1	N-9°-W	隅丸方形	
SBSa08	3 K × 3 K	180~200	120~140	550	420	23.1	N-30°-W	隅丸方形	
SBSa09	2 K × 3 K	180~200	150~170	480	380	18.2	N-31°-W	隅丸方形	

表3 Sa区掘立柱建物一覧

第3節 東部低湿地の調査

1 はじめに

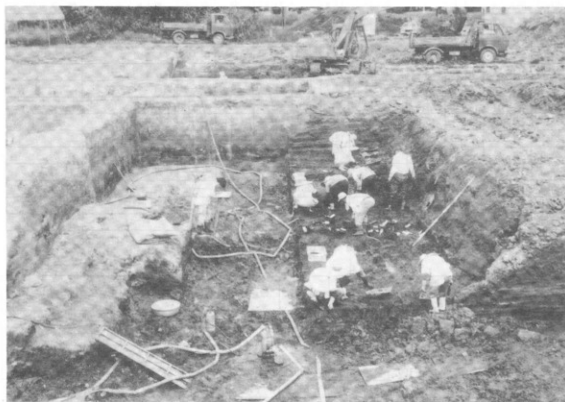
東部低湿地と称した場所は、Na区Nb区Sa区の住居跡等が存在した東側に位置している。Na区とNb区の東側は総称して、Ne区とよび、それぞれNa区側をSXNa02、Nb区側をSXNb03、Sa区は東部落ち込みと仮称して発掘した。

調査面積はNe区で、約1500㎡・Sa区では約240㎡を調査し、最深部では海拔1m前後で地山に達した。住居跡の存在した微高地との比高差は約4mである。

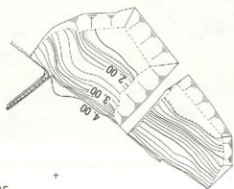
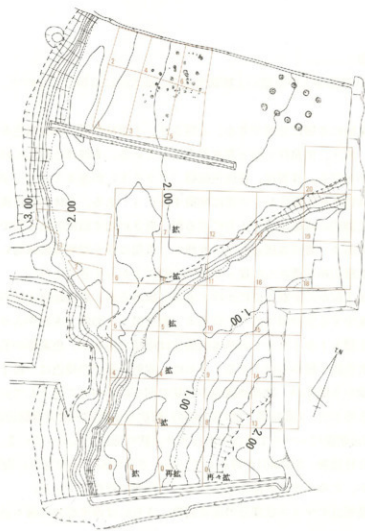
調査は、昭和60年8月上旬から11月上旬までの約3ヶ月を要した。調査当初1m程掘り下げるとグライ粘土層が広がり、それ以下に遺物は希薄であると考えたが、SXNb03の一部分で重機により下部にトレンチを入れたところ、多量の土器片が出土した。その後SXNa02側の発掘を進めてゆくにつれて、土器片、自然木等の出土量が増加したためNe区では、発掘区を拡張して調査にあたることとした。

調査は土量等の関係から、セクションベルトを残しつつ、遺物が多量に含まれる黒色粘土層上面までは重機で掘削し、以下人力で掘りすすめた。

このように、東部低湿地の今回の調査では予想に反して多量の遺物が出土したため、当初からは計画的には発掘ではなかったのが残念ではあるが、遺物の検出と旧地形の復原という2点に主眼を置き、その後の発掘を続けた。



第41図 SXNa02、3・4・5区付近発掘風景（南より）



第42図 東部低湿地発掘区割図

2 土層と地形

第44図はNe区南壁および北壁の土層図である。基本的には類似するので、南壁土層を中心に説明を加えたい。

土層は、基本的に6層に分層できる。上層より、Ⅰ層は色調的には褐色を呈し質的には砂質であり、現在の耕作上、床土、旧耕作土などが水平堆積している。Ⅱ層は色調的にはⅠ層と類似しており、質的にはやや粘性をおびる。Ⅲ層は、青灰色細砂（グライ土）が基本であり、西縁から7m前後の部分では、粘質土と砂質土が互層にレンズ状に堆積する部分がある。全体的には東側に至る程厚く堆積している。Ⅳ層は色調的には暗灰色で下方に至る程、黒さが増す暗灰色粘土層である。Ⅴ層は、色調的には黒褐色～黒色であり、微高地縁辺に厚く堆積し、東側にゆく程堆積幅は薄い。Ⅵ層は、砂礫層で地山と考えられ微高地縁辺から離れるに従ってレベル的に上がってきている。

遺物は、Ⅲ層下位からⅣ層上位にかけて出土し始めるが、微高地縁辺から離れる程遺物は希薄になる。Ⅴ層が遺物の集中する包含層であり、自然木・須恵器・土師器・木器が入り混じって出土している。

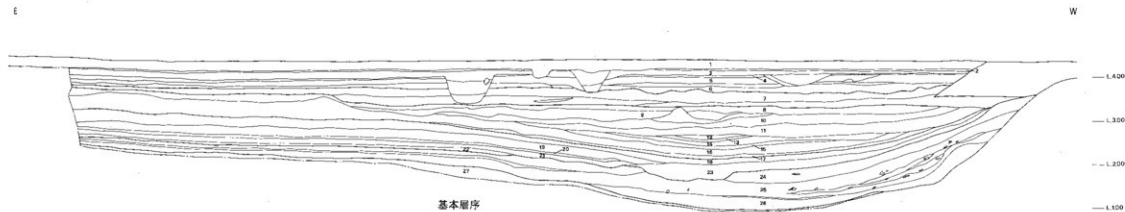
また、北壁土層もⅠからⅥまでの基本的層位は同様であるが、色調等の若干の差異は存在する。遺物はⅣ層中の暗灰色粘土層から出土する。さらに、北壁部分での特色は一層下位の黒色砂混土（Ⅴ層）から、庄内併行期の土器片が、微高地縁辺の谷状の凹みに集中して出土していることである。

地形的にまとめると、（第42図・第43図参照）海抜5m前後の微高地縁辺からの谷筋部分が南北方向にのび、約2.2m前後のレベルではほぼ平坦なテラス状の部分が広がっている。このテラス状の部分に柱穴群および掘立柱建物、SBNe01が存在している。さらにNe区南東部分に海抜2m前後から約1m程の落ち込み部分が、このテラス状部分をえぐるような形で存在している。

これらの谷筋部分やテラス状部分の成立過程、さらには南東部分の落ち込み、掘立柱建物等について以下検討を加えてゆきたい。



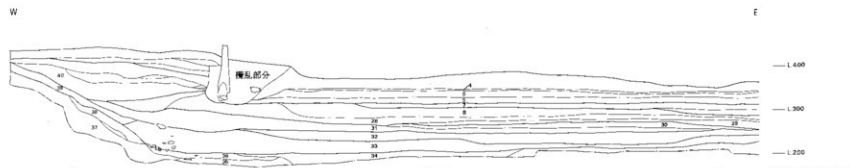
第43図 Ne区完掘状況（手前SBNe01，北東隅より）



基本層序

- I...1-5
- II...7
- III...8-17 (グライ土中心層)
- IV...18-23 (暗灰色粘土中心層)
- V...24-26 (黒色粘土中心層)
- VI...27 (礫山層)

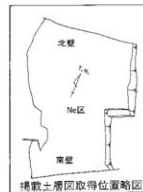
Ne区南壁土層図



基本層序

- I...4-6
- II...7・40
- III...8・28・29 (グライ土相混層)
- IV...30-32 (暗灰色粘土中心層)
- V...33・39 (黒色粘土中心層)
- VI...34-38 (礫山層)

Ne区北壁土層図



以東はほぼ同様



第44図 Ne区南壁・北壁土層図

- | | | |
|---|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 耕作土層 2 黄褐色砂質土層 (黄土) 3 灰褐色砂質土層 (旧耕) 4 黄灰色砂質土層 (旧床) 5 3層と類似 6 暗黒褐色粗混灰褐色粘質土層 7 (薄灰) 灰褐色粘質土層 8 黄褐色細砂質土層 (西になるほど灰色が残る) 9 黄灰色粘質土層 10 暗灰色細砂層 11 暗灰色細砂質土層 12 暗灰色細砂層 (10に類似) 13 暗灰色粘土層 (中にやや青味がかった砂質粘土層が帯状に走る) | <ul style="list-style-type: none"> 14 (青) 灰色細砂質土層 (16に類似) 15 暗灰褐色粘土層 (13に類似) 16 (青) 灰色細砂質土層 (グライ砂) 17 暗灰褐色粘土層 (13に類似) 18 灰色砂混粘質土層 (16より強く粘質増す) 19 暗灰褐色粘土層 (13に類似) 20 暗青灰色砂混土層 21 暗灰褐色粘土層 (13に類似) 22 暗青灰色砂混土層 (20に類似) 23 黒灰色粘土層 24 暗褐色粗砂層 25 黒褐色粘土層 26 黒色粘土 (わずかに青味がかる) 27 灰色砂混層 | <ul style="list-style-type: none"> 28 ㊸に類似 (部分により灰色、褐色が強まる) 29 黄褐色細砂層 30 灰褐色細砂質土層 31 灰褐色砂質土層粘質土層 32 暗灰色粘土層 (黒色粘土中の有機分減少による灰化) 33 黒色砂混土層 (珪生土薄片包含層) 34 (雜) 褐色細砂層 (軟質) 35 青灰色砂層 36 青褐色砂混粘土層 37 暗褐色硬質粗砂 38 ㊸の層が暗褐色に変色やや多砂 39 ㊸の層が暗褐色に変色 40 ㊸に類似 |
|---|---|---|

3 弥生時代後期の包含層

(1) 調査の概要

SXNb03と仮称した部分は本節1. はじめにの部分で述べたように庄内併行期の竪穴住居跡が存在した微高地Nb区の東側の谷筋部分である。この東部低湿地の調査の中で最初に発掘した部分である。調査は当初微高地縁辺から約8 mまでの所を発掘した。その後SXNa02の発掘と併行して発掘をすすめた。

微高地縁辺から約8 m部分までの発掘は、Ne区内で最初の場所ということや、はじめにの部分で記述したような事情から重機で5 cm前後掘り下げながら、土層堆積状況の観察・レベルの確認をするという形で遺物の検出をすすめた。その後は、SXNa02と同様遺物包含層上面までは、重機で掘削し以下は人力により発掘した。

遺物はコンテナで40箱出土している。中心は庄内併行期の土器片である。ほとんど未整理であるため、個体数は未確認であるが、薄く広がる上層の暗灰色粘質土からは、古墳時代後期以降の遺物も少量出土している。遺物のほとんどが、微高地縁辺に、沿うような形で出土している。

(2)、まとめにかえて

前述したように遺物整理ができていないため、十分な報告はできないが遺物の出土状況等から旧地形



第45図 SXNb03 土器出土状況

に関して次のようなことが推測できる。少なくとも、弥生時代後期には微高地縁辺に谷筋がほぼ南北方向（Ne区南側ではやや東よりにカーブ）に存在していたと思われる。以下簡単に理由を述べる。まず、庄内併行期の遺物が調査の概要に記したような形で出土したこと。後述するSXNa02と仮称して発掘した1・2区の遺物のほとんどが庄内併行期の土器片であること。また4・5区の出土遺物の中にも庄内併行期の土器片が確認でき、これらの庄内併行期の土器片が、第45図のような状況で確認できることなどが理由としてあげられよう。この谷筋は庄内併行期の土器片の出土状況や、SXNa02と仮称して発掘した0・3区では庄内併行期の土器片は1点を確認するのみであったことなどから落ち込み部分形成時の営力により切り込まれた可能性も残されている。

4 古墳時代後期以降の包含層

(1) 調査の概要

本節1. はじめの部分にSXNa02と仮称した自然河川の発掘方法の概要を示しているが、さらに具体的に補足すると以下ようになる。各発掘区は、5mの正方形である。

(0区は第42図のような形になっている。) 遺物の取りあげは、原則として平板によりNo.を与えてレベルを付して取りあげた。自然木や土器の小片も多量に出土しているため、5m方眼の中にさらに1mの方眼を設定し、これらは5区Aというような形で取り上げた。

出土遺物としては、弥生土器片・須恵器・土師器・木製品・鉄製品および自然木など多様である。出土遺物の整理が十分ではないので、本概報では、0区・0区拡張区(以下0拡張区と称す。以下同様に略す。)・0再拡張区・0再々拡張区・3区・3拡張区・4区・4拡張区・5区・5拡張区の10地区の遺物を中心に検討を加えて、Ne区の成立過程等を明らかにしてゆきたい。

(2) 0・3・4・5区の様相

Na区の東側谷筋部分とテラス状の部分に比高差約1mをもつ自然河川がSXNa02である。本概報では、0・3・4・5区(それぞれ拡張区を含む。)について発掘時の観察事項をまじえながら、各区の様相を紹介したい。尚、0・3・4・5区は、この落ち込み部分の中心的位置でもあり、これらの遺物や遺物の出土状況の検討をすることは、その成立過程などを知り得る手がかりになるとと思われる。これらの0・3・4・5区の遺物に関して、整理作業をすすめる中で器種分類等の作業を実施したので、これらの結果もふまえて紹介したい。集計にあたっては、文末に示すような視点・留意点のもとに実施し

北

A	J	K	T	U
B	I	L	S	V
C	H	M	R	W
D	G	N	Q	X
E	F	O	P	Y

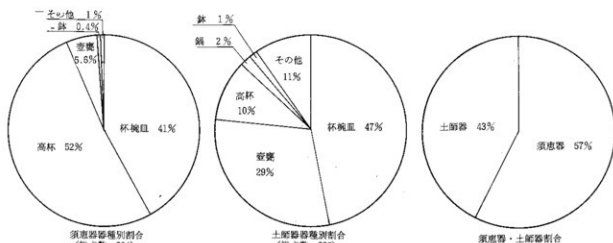


表4 SXNa02, 0・3・4・5区出土土器集計

発掘区	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	(cf) SXNb-03
コンテナ数	36	26	15	10	26	12	5	2	1	2	3	3	1	極少		1	2	1		2		40

表5 SXNa02 発掘区別土器出土量

(コンテナ55cm×34×15)

ているが、接合の不十分さ・小片の多量なことなどから今後の整理作業の進行の上で、多少の変動はあると思われる。

0区は、SXNb-03の遺物集中部分(Nb区の微高地縁辺から東へ約8m程)に引き続いて発掘した場所であり、遺物の出土量・質に圧倒され東側に拡張を重ねた場所である。須恵器は、器種的には平均しているが、円面視(巻首図版)が出土している。土師器は他の区と比較してに変化に富み、片口鉢・器種不明の土師器(図版第21図)などが一般的な器種に混じって出土している。また、フイゴの羽口も出土している。

3区は、器種的に平均していると言えるが鉄鎌(巻首図版)の出土が特筆される。また、柄の種が、この落ち込み部分全域から出土しているが、特にえぐれを有するものが集中的に出土した場所でもある。

4区では、須恵器の高杯を87点確認しているが、0・3・4・5区全体の総数確認数157点のうち50%弱を占めていることがあげられる。また今回未整理になっているSXNb 03の遺物および1区2区の遺物(コンテナ81箱)の大勢を占める庄内併行期の土器片がコンテナ1/3箱出土している。また木器としては、横植・鋤柄と思われるものが出土している。

5区は、器種的には平均しているが4区にも見られた庄内併行期の土器片が、コンテナ2箱分出土している。この弥生土器片は、0・3区では1点を確認するのみである。また出土している斎串6本中4本が5区区の砂礫直上より出土している。

以上が各区の特色であるが、須恵器について集計作業の中で気づいた点を簡単にまとめてみたい。まず、4区の説明のところでふれたが、高杯が個体数の半分以上を占めていることである。これらの高杯はすべて短脚であり、杯部にかえりを有するものは1点のみ確認しているが、その他はすべてかえりが無いものばかりである。杯身・杯蓋について総数で102点を確認しているが破片も多く、本来的な個体数は、この数字を上まわると思われる。その中で杯蓋は50点を確認しているが形状の明確なもの42点を次の①から④に分類をすると次のようになる。

分類	種類	個数	分類	種類	個数
農 工 具	鍬	1	農 工 具	盆	1
	鋤先	3		鉢	1
	鋤柄	1		節	4
	堅杵	1		下駄	6
	(鎌または刀子の)柄	1		竪柱	2
	木植	8		蓋	2
編 み 具	木錘(こも編み錘)	37	祭 具	船形模造品	2
	糸巻	1		文字(漢字・羅字)のある板・木片	2
	紡錘車	1		斎串	6
	絡繰(編み台)	1			
生活用品	曲物(側板)	6	その他不明木器多数		
	(曲物の)蓋板・底板	43			

表 6 東部低湿地出土木器一覽

①つまみをもたないもの	14点
②つまみ付きでかえりがあるもの	5点
③つまみ付きでかえりが退化しているもの	16点
④つまみ付きでかえりが消失しているもの	7点

③については完全にかえりが内に入っているものと少々でているものがあり、全体的には②から④については各時期平均していると考えてよいと思う。その他点数の少ないものとして片口鉢・平瓶・瓢箪などがあげられる。以上、極めて大まかにしか紹介できていないが遺物的には7C代が中心であり、高台付きの杯身などに、一部8C初頭と思われるものも混在している。

木器については、一覧表・図版等での紹介が中心になっているが、用途不明の木器も多く今後検討を加えてゆきたい。

以上、各発掘区の特徴、遺物等について紹介してきた。

(集計上の留意点)

- ①完形または、接合によりほぼ完形となったものを個体数1点としている。
- ②杯身・杯蓋・椀・皿の小片および壺甕の体部については集計の対象としていない。
- ③高杯の場合、完形・ほぼ完形以外に脚部が完形で残存しているものは個体数1点としている。
- ④壺甕については、口縁部を集計の対象として、口縁破片を $\frac{1}{2}$ ・ $\frac{1}{4}$ ・ $\frac{1}{8}$ に分類し $\frac{1}{2}$ が2個の割合で1個体として集計している。
- ⑤土師器については、体部等の破片が多く表4に示している土師器・須恵器の割合はSXNa002出土遺物の総体を示しているとは言えない。

註 奈良県立橿原考古学研究所付属博物館『特別展 法隆寺考古展』昭和60年に金堂柱発見の桃核として鎮壇の儀式に使用しているとの類例が紹介されている。



第46図 自然木等出土状況

犁〔カラスキ〕

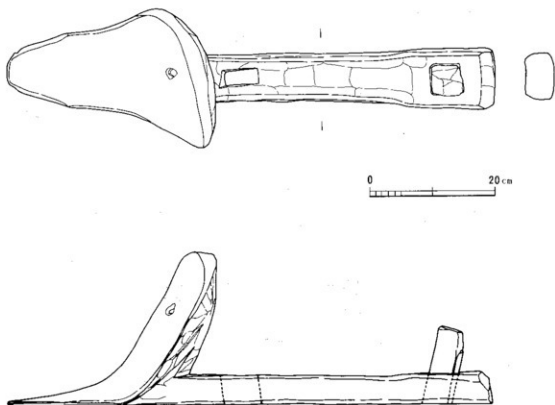
Na区の東側の自然河川SXNa02から多量の土器・木器・自然木と共に出土した。出土土器から7世紀代のものと考えられる。全長78cmを計り、一木で造り出された長床式のものである。ヘラは進行方向に向かって左側に傾いた面で構成されており、壘土は左側に反転される。ヘラサキには、鉄製の鋤先が装着されていたと考えられ、先端から10cmまで細く尖り気味になっており、左右の端部も薄くなる。壘土を反転するヘラの表面は非常に滑らかで、裏面には成形時の荒い加工面が残る。

イサリと呼ばれる床とヘラとは別の面で形成されており、両部位の区別は明確である。床の底部は角がなく丸味を有している。また上面は中央部がわずかに凹んだ形状を呈する。床には2穴が穿かれる。タタリカタと呼ばれる柱状の部材が挿入されるヘラ寄りの納穴は、長さ6cm・幅2.6cmの長方形を呈し、ヘラ寄りに前傾するように穿かれている。納穴のヘラ寄りの面を上方に延長するとヘラの裏面と接する。イサリノエと呼ばれる柱状部材が挿入される納穴は1辺が5cmの正方形を呈する。イサリノエも長さ13cm程残存し、板状の木製楔で固定されている。この納穴は後方に傾くように穿かれている。タタリカタとイサリノエは、上方で逆「ハ」字形に開く形状を呈するものである。なお床はイサリノエが正方形で大きいいためか、後部で幅広となり、厚さもわずかに増す。

犁に使用された木材の材質については未分析のため今後にゆずるが、硬質の材質の木材を使用していると考えられ残存状況は良好である。この犁は非常に定形化した様相を呈するものである。

なお付近からは用途が不明な木器類も多く出土しており、その中には代カキ用の馬鍬の一部と考えられるものや組合せて使用する鋤の柄と考えられる農具類も出土している。

参考文献 木下 忠 『日本農耕の起源と伝統』 雄山閣 考古学選書 24 1985



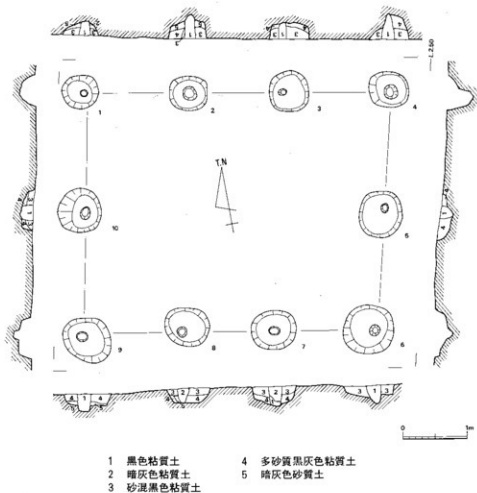
第47図 犁実測図

5 掘立柱建物

本建物は、No区の北東隅に位置する2間×3間の建物である。長軸の方向はN-81°-Wで、規模は長辺4.8m、短辺3.8mを測る。柱穴は直径70cm前後の不整円のプランをもち、すべての柱穴から柱根を確認している。柱穴内の遺物としてはNo-6の柱穴が無遺物であった以外は、小片ではあるがそれぞれ3個から20個の土器片等を出土している。土器片の総数は、45個であるが、No-4の柱穴から須恵器片1個を確認している。その他は土師質の小片である。またNo-3の柱穴からは桃の種と思われるものが4個出土しているが、うち2個にはえぐれを有していた。

本建物の確認面は、青灰砂礫層の上面ではあるが柱穴内埋土にこの青灰砂礫土の上位の土層である黒灰色粘質土と、さらに上位のグライ粘土が混入している。この黒灰粘土質は7C代の木器、土器が多量に出土した自然河川の埋土の一部でもあることから、すくなくともこれ以降の時期となる。

(藤田)



第48図 SBN01

6 Sa区東部落ち込み

現地形で農道と、それより北西へきれこむように在る畦畔の東側は、その西側と約15～30cmの比高差をもって低くなっていた。調査の結果このラインは地山（黄褐色粘土）の落ち込みを反映していることがわかった。落ち込みと称したこの部分は、耕作土及び内耕作土と思われる砂質の間層を除去すると、黄灰色砂質土があらわれ、この面に掘り込まれた溝2条のうち1条の埋土より畿内産の瓦器が出土している。それより下位の状況は、青灰色粘質土、暗灰色粘質土、黒色粘土とNe区のSXNa02とはほぼ同様の土層序を示し、青灰色砂礫層（地山と考える）の底が現れる。

国道・農道等の関係で発掘面積に限りがあったのが残念であったが、底は標高1.2mで東の微高地との比高差は約3.0mである。

遺物は、須恵器・土師器の外に、桃核・下駄・畜串等が主に黒色粘土を中心に、コンテナ7個分ほど出土した。また、斜面に平行に直径15cmほどの自然木の幹も検出した。さらにそれより下位からは大木の根元の部分も出土した。

それぞれの遺物は、Ne区同様依存状態が良好なものが多かった。遺物整理が完了していないため、詳細には述べられないが、現段階での機種・器形別の点数を下に挙げておく。なお、破片については口縁部の点数を示した。

須恵器 杯身12 蓋2 高杯3 横瓶1 長頸壺8 短頸壺1 甕3

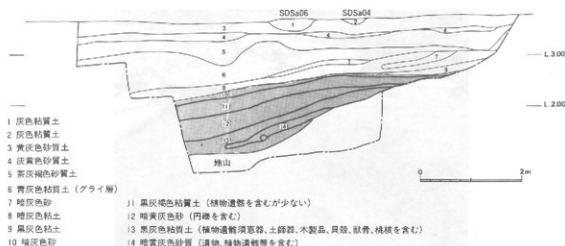
土師器 杯4 皿3 高杯2 鉢2 盤1 甕19 蛸壺3 製塩土器1 鍋1

土師質土器 椀1 小皿1

このうち図化したものを第54図に掲載した。なお第54図13は縄を通す穴を2ヶ所に穿けた「マダコ」獲り用の蛸壺であると推定できる。長胴形で粗雑な調整がみられるのが特徴で、これが蛸壺のひとつの実例になることは同様のタイプの土器の器種決定に手掛かりを与えたことになろう。

土層序、遺物の状況から、Sa区東部落ち込みは、Ne区のSXNa02、SXNb03との関連も考えないわけにはゆかない。Na区にみられた竪穴式住居を中心とした遺構とSa区の建物を中心とする遺構には一定の時期差があるものと考えられるが、東部落ち込みとSXNa02が同一とすると、この流れが埋没していった過程を遺物の検討等から解明してゆくことが、集落の変遷を考える上での重要な課題となろう。

(松野)



第49図 Sa区落ち込み東壁土層実測図

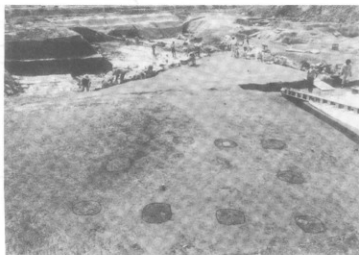
7. 小結

東部低湿地について、SXNb03・SXNa02・SBNe01・Sa区東部落ち込み部分と発掘時の仮称に従って事実報告を中心に説明を実施してきたが、これらを総称して東部低湿地とした部分の全体像をまとめてみたい。

竪穴住居及び掘立柱建物群からなる住居域が広がる微高地部には、下位から砂礫層・砂層・砂質土層・粘質土層の順の基本堆積層が認められる。その上位には部分的に各時期の遺物包含層が広がり、最上位は現水田耕作土層である。現在検出している弥生時代前期以降の遺構は、前記した微高地部の基本堆積層の一つである。黄褐色を呈する粘質土層の上位から掘り込まれたもので、基本堆積層の形成は非常に古い時期の所産である可能性が高い。ちなみにこの黄褐色粘土層は、広く丸亀平野全域の平地部で確認できる土層であり、四国横断自動車道関係の普通寺市永井遺跡などにおける縄文後晩期の自然河川等もこの黄褐色粘土層よりも上位からのものである。また同じ四国横断自動車道関係の普通寺市下所遺跡では、黄褐色粘土層中から旧石器時代のナイフ形石器等が転磨していない状態で出土している。

また下川津遺跡の自然河川の最下部から、転磨が認められない有舌尖頭器片が出土している。しかし他の微高地部の基本堆積層からの遺物の検出は現在のところ皆無である。本遺跡の近くには、城山・金山・国分台といったサスカイトの原産地があり、旧石器時代の遺跡群が集中する地域での上記の状況からすれば、微高地部の基本堆積層の形成は非常に古い時期の所産である可能性が高い。

こうした微高地に立地する遺構で現在のところ最も古いのは弥生時代前期古段階の浅い落ち込みである。Sa区で検出したこの遺構と類似したものは南に隣接するSe区でも確認している。特にSe区のは中央部に焼土面と周囲に柱穴状のビットがめぐるので竪穴住居の可能性が考えられる。東部低湿地の掘立柱建物SBSe01の確認面下位は弥生時代前期の土器片が散見され、すでにこの時期には自然河川が存在していたと考えられる。時期が確認できるのは、その後Nb区東側の庄内併行期の自然河川であり、その間の時期の遺物は現在のところ皆無である。その後自然河川は少なくとも6世紀末～7世紀初頭の時期に一段深く、Na区の東側をえぐるように東北方向へと流路を変えたものと考えられる。流路の変更の時期は、出土遺物からは不明であるが、Sc区という南部の調査区で6世紀後半の竪穴住居群が検出されていることや、わずかに1棟だけであるが布留期の竪穴住居がNa区に存在するにもかかわらず、



第50図 Ne区完掘直前風景

庄内併行期の自然河川の上位層に、該当する時期の遺物が認められないことなど、布留期には流路が変化していた可能性もある。ただ国道11号線より北のこの地区の微高地上では、古墳時代前期～中期頃にかけての遺構が稀薄もしくは未確認であることなど、流路変更の時期は、現状では確認上限が6世紀末葉前後としておく方が妥当であろう。

またこの新しい時期の自然河川で、Sa区の東側ではNa区の東側よりやや新しい時期の遺物がやや多く認められる。自然河川の堆積層は、細かくみるとシマ状に薄い堆積が多く認められ、当然のことながら堆積時期の時期差があると考えられる。ただ国道11号線下部の未掘部があるため両地区の自然河川の層位の連続性を確認するには至らなかった。しかし現状では、Na区とSa区の微高地上の遺構の時期差が隣接する自然河川内の遺物の時期差と関連するものと思われ、Na区東側の自然河川SXNa02の上位層とSa区東側の自然河川の遺物出土層とが連続するものと考えられる。なお、SXNa02から出土した多量の木器類は7世紀代の土器類と混在するように出土しており、上位よりわずかに出土したと考えられる8世紀代の土器群とは異った出土状況と考えている。

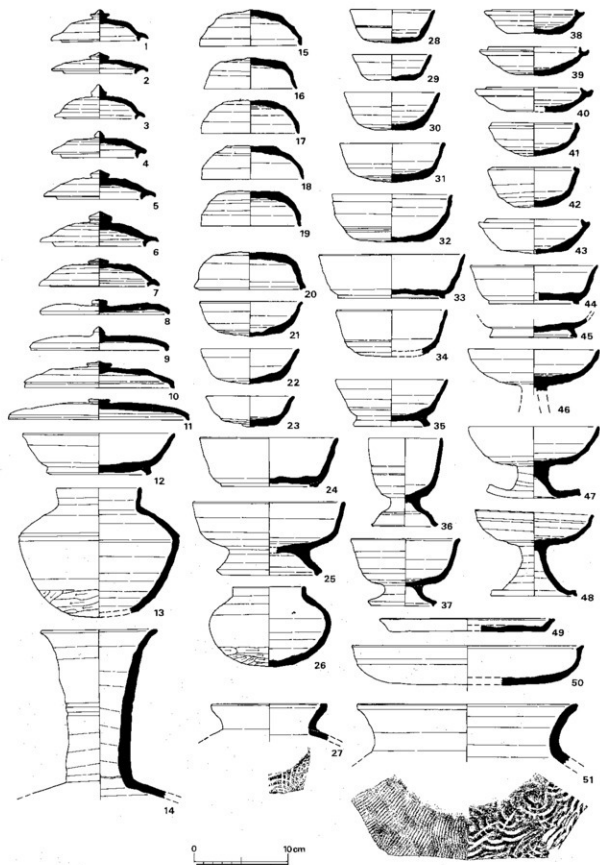
少なくとも上限が6世紀末葉まで逆のぼる自然河川SXNa02がかなり埋没し、その上位にグライ化した粘土層が堆積し、ある程度周辺が安定化した時期以降に、標高2.8m前後の面に掘立柱建物SbNe01が営まれたと建物の柱穴埋土から考えられる。微高地よりも比高差で約2m程下った標高2.8m程の低いテラス上に建物が営まれているとは確認まで想像もしなかった。ただこの遺構面は、微高地の西側に位置する低地で検出した平安時代中葉以前の時期の水田面とはほぼ同様の標高を示すことは注目に値する。

今後の整理作業の中で、微高地上位の遺構と自然河川の関係の詳細については明らかにしていきたい。

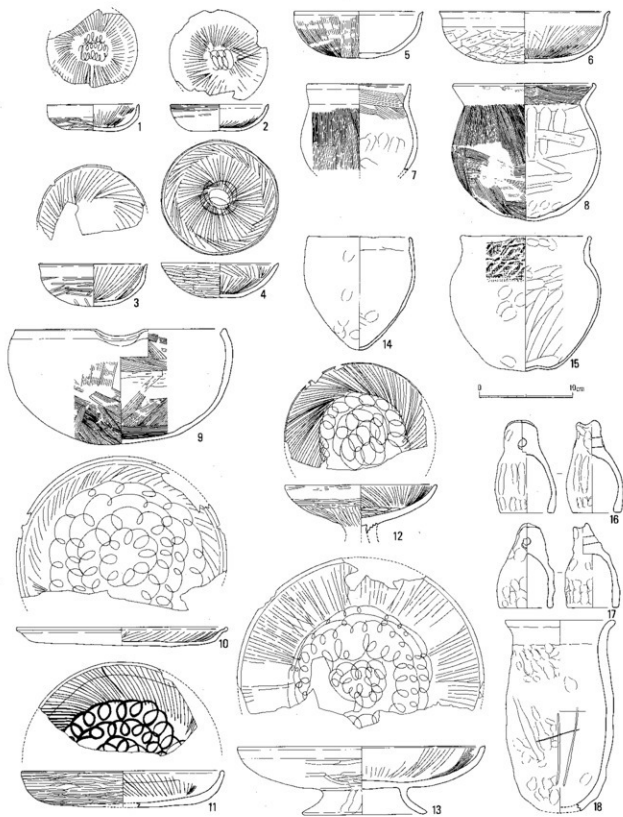
(藤好)



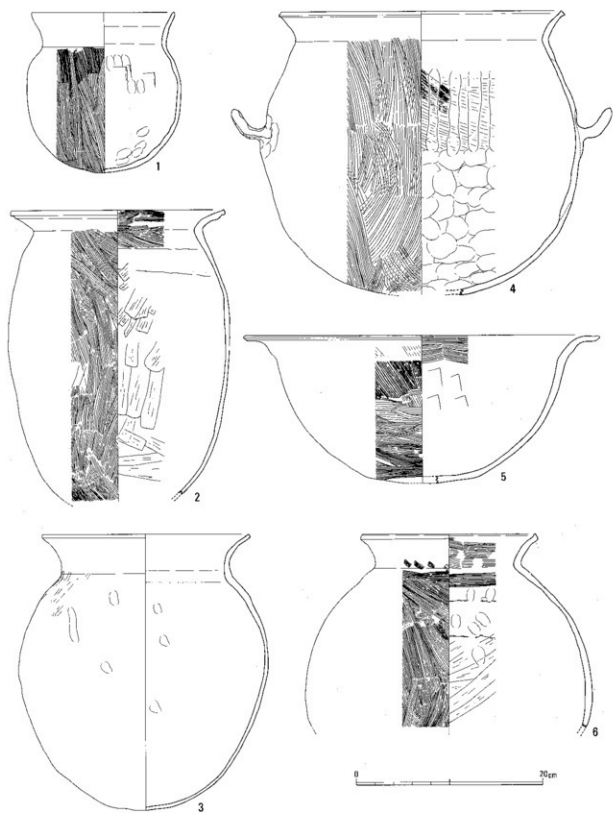
東部低湿地 (SXNa02) 発掘風景



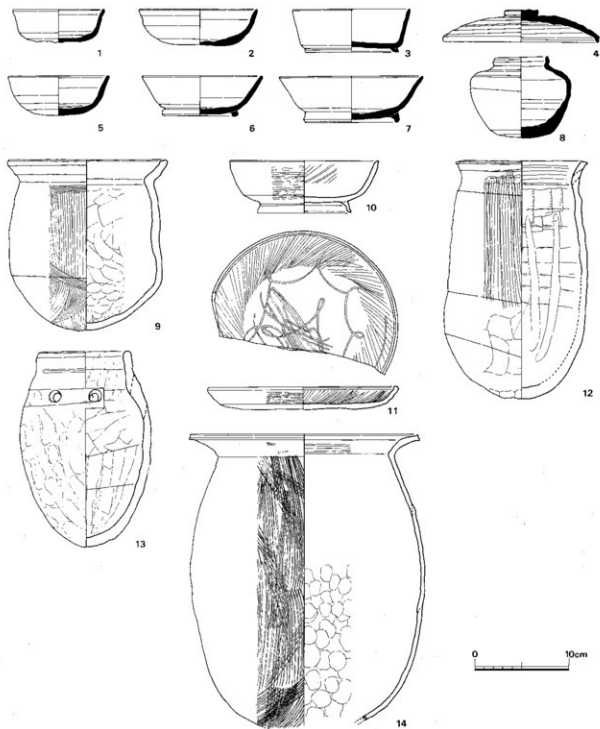
第51图 Ne区出土遗物实测图(须惠器)



第52图 Ne区出土物实测图(土器)



第53图 Ne区出土文物实测图(土器)



第54图 Sa区落込み出土遺物実測図

第4章 おわりに

昭和60年5月から開始した下川津遺跡の本調査は、今年度末で28,600㎡終了した。下川津遺跡の調査対象面積が88,600㎡であることから、約3割が終了したこととなる。昭和59年度に実施した予備調査により実質的に始まった下川津遺跡の調査は、調査の進展につれ、遺跡の内容の豊富さが明らかとなってきた。

調査区のはば中央部を南北に伸びる微高地部では弥生時代前期以降の集落跡が広がり、その東側には多量の土器・木器を含む自然河川が走り、西側の低地部には平安時代中期以前に逆のぼる水田跡が広がっていることが判明した。調査対象地の北部と南部では微高地部が狭くなっていることから、本遺跡の調査は地形的に完結性を有した集落全域の調査とすることができよう。微高地上で、今年度の調査対象地には弥生時代前期、弥生時代末～古墳時代初頭、古墳時代後期以降の各時代の住居群が検出された。竪穴住居群は時期毎に占地が異なる。弥生時代末～古墳時代初頭の時期では、円形の大形住居と隅丸方形の中形・小形の3型態の住居で構成され、隅丸方形の小形の住居には炉跡がないなどの特徴がある。また古墳時代後期には方形の平面プランを有する住居跡に限定され、大形のものにはカマド付のものが認められ、1辺が2m四方程度の非常に小形でカマド・炉等の施設を有しないものも存在し、中形のものには工房跡と考えられるものがある。こうした各時期の住居群の構成が確認できた点や、竪穴住居の形態の変遷が把握できるなど資料の価値は高い。またこうした時期に掘立柱建物による倉庫等は、遺構の残存状況から時期比定が困難なため、同時併存的な構成については明らかにできなかった。また集落域の東側に広がる自然河川からは、7世紀代の多量の土器群に混在するように、カラスキ・下駄・盆・琴柱等の木器類が出土した。特にカラスキは7世紀代に逆のぼる例は全国的にも例がなく注目される。自然河川からは木簡の一部と考えられる墨書板片や円面硯等も出土していることも、微高地部で検出された掘立柱建物群等の性格を考える上で興味深い資料であろう。

また微高地の西側では、標高2.8m程の位置で平安時代中葉もしくはそれ以前に逆のぼる水田跡を検出した。県下では初例である。水田跡に設定したトレンチの土層や宮崎大学農学部藤原宏志助教授により実施していただいたプラントオーバーによる分析では水田面が前述のもの下位にも存在することが判明している。カラスキが出土した遺跡でもあり、カラスキの出現の前後で、水田の規模の変化が確認できる可能性がある。水田跡は昭和61年度の調査対象地で最も広く分布していると推定される。

下川津遺跡は立地的に限定された住居域が中央部に広がり、その周辺に水田跡や多量の遺物を含む自然河川が流れる遺跡である。時期的にも弥生時代前期から中世までの集落遺跡であることから、生産を含めた集落の変遷を確認できる可能性が高い。

昭和63年度に瀬戸大橋が開通する予定のため、本遺跡の発掘調査は対象面積の広さの割に、時間的に制約された調査となっている。来年度は4万㎡を対象とし、発掘調査もピークを迎える。

(藤好)

版 圖



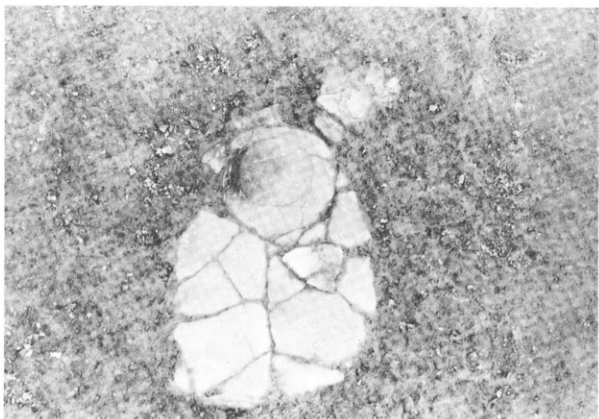
(1) SBNb05 全景



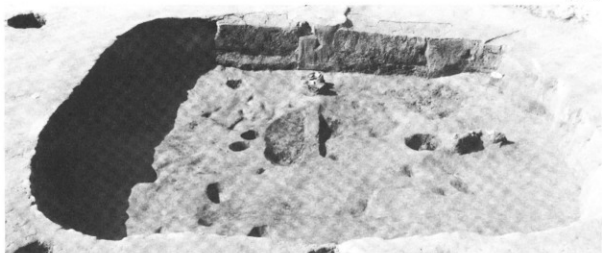
(2) SBNb05 炭化材検出状況



(1) SBNb01 完掘状況



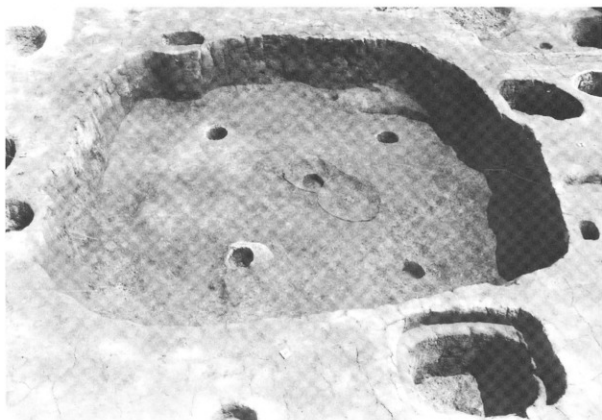
(2) SBNb01 遺物出土状況



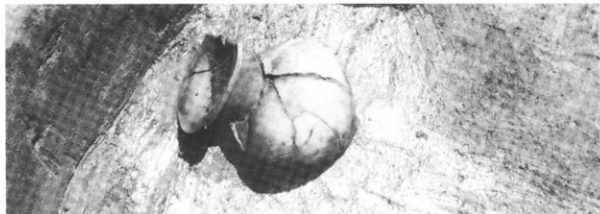
(1) SBNa01 完掘状况



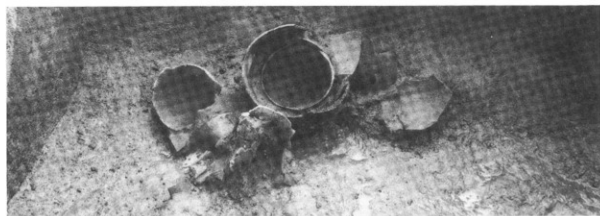
(2) SBNa01 床面露出土状况



(3) SBNa02 完掘状况



(1) SBNa02 床面壺出土狀況



(2) SBNa02 床面遺物出土狀況



(3) SBNa02 床面土器出土狀況